

## 昨年の史學・考古學・地理學界

史學一般 昨年 に於ける本欄に屬する論說を以て著

しい特色は見られないが從來に比して經濟史觀に關するものゝ少かつたことは一層寂寞を覺えしめる。著書としてはこれまであるべくしてまだ見られなかつた本邦史學史たる「日本史學史」(清原貞雄著)がある、本書は古代から徳川時代までの史書の編纂、主要な史籍の解題で大部を占めてゐるが同時に各時代に於ける史風の變遷に關して可なり詳細な敘述を試み、歴史實事を理論的に説明しやうとした、そして支那の史風から獨立したものを以て愚管抄、神皇正統記、讀史餘論を挙げ殊に最後のものは著者の出身境遇に累された偏見がなく歴史家として拔群の天才である白石の獨創的な哲學的解釋を試みたものにしてゐる。

雜誌に見えた論文でも「歴史の認識に於ける概念の機能」(田邊元、史林)は歴史の認識に現はれる概念は論理學

の規定する概念とは本質的に異なり歴史の認識の成立には言語の表現を必要とする、言語の表現は普遍を目指すものではあるが其の機能は概括よりも區別にある、論理性は言語からの解放を要求するが歴史性は言語と密接の關係があり、經驗科學中自然科學と歴史を對立せしめることは必然的に概念に就ても兩種の機能を區別するを要求するものであつて歴史概念は論理的な概念と對立するものとし「史學に於ける過去の認識」(同人、哲學研究)は現實の理解と假象の理解即ち史學と藝術の理解に於て内容上方法論的に如何なる相異なるかを考へ、藝術の受用は無關心を特徴とし歴史の認識は記憶を通して過去の現實を我々の意志に交渉をもつ關心を對象とするとし歴史の理解は現實の生そのものに聯關的に所屬する過去の理解たるを要する、そして歴史は過去に成立するといはれるが實は過去を含む現在否、現在を媒介として過去を擔ふ

未來に於て成立するこいふべきではあるまいかとし、「經濟史研究序論」（野村兼太郎、三田學界雜誌）、歴史は綜合現象を對象とするものであつて綜合現象は個々の構成現象の集合ではない、故に經濟現象も歴史現象もこいふ總體のうちに融合してゐる一現象であつて他の歴史現象から單獨に分離する事は出來ぬ、しかし文化發展の全過程が如何なる經濟狀態の基礎の上に立つか、又其の文化の他の部分に於ける發展と經濟狀態と如何なる作用、反作用をなしてゐるたかを描くものとして經濟史は成立し得る、そしてある時代の經濟狀態を中心として直接それを生じた又はそれに由つて起つた現象を描寫するが經濟史の任務であるとし、「歴史智識の實際的意義」（今井登志喜、史學雜誌）は歴史智識の實際的效果は世俗にも或は史學の學徒にも誤解がある、また現今では化石扱せられてゐる實用主義の歴史理論は歴史の純正原理としては兎も角歴史智識の實際的效果の上からは尙考察の餘地がないとはいへぬ、歴史智識の實際的意義は歴史的生成物即ち社會又は文化の現狀を解するにあるがこゝに戒心すべきは歴史

智識が盲目的に歴史的存在を固執させ、屢々歴史の究明は頑固な保守思想と結合し易いことである、しかし眞の歴史智識は過去への執着よりも却て實踐的態度を反省させ矯正するに役立つものである、近代の史學は歴史を純化するために實用主義を歴史研究の目的から除外したがこれがために正當な歴史の實際的意義をも没却するは當らぬとし、「反歴史主義批判」（羽仁五郎、同誌）は歴史家ならぬ考證家に取り扱はれた文獻學的歴史の確實性は典據の確實であり相對的確實に過ぎぬ、之に對して廣義の文獻學的方法はそれらの専門學の研究の結果を綜合するにあるが各種の専門學は一人の歴史家の研究には尨大廣汎に過ぎる、文化史はそれら多數の専門家の説を其儘容れて個々の傾向の歴史の並列に甘んずべきでないとするれば當然其の綜合に困惑する、そこで文化史は綜合に於て所謂藝術的綜合法を採用した、之は中世の教會史に於ける原理即神の攝理と同様神學的確實性を缺き非歴史的なものを引き入れ反歴史主義に陥つた、然らば我々の歴史の立場は何か、歴史がそして文化の發展が典型的に或は基

礎的に一つの生の様式に表はさるゝならばこのものは全  
歴史性の解釋を與ふべきであり、我々の歴史的存在性を  
決定するものである。こゝ唯物史觀を力説してゐる。「歴史  
ミ理想」(瀧本誠)、三田學會雜誌「歴史ミ理想」は相互  
に作用するこゝ腦力ミ體力に比すべきものがあるがしか  
しまた屢々相反撥する、理想遠大なれば歴史ミの距離は  
遠ざかる、社會の進歩に伴つて理想は複雑になり歴史  
批判を以てしては到底考へられぬこゝも理想として  
易に考へられ且これを現在社會に實現せしめようとする  
理想の効果は破壊、歴史の效用は保守であるから従つて  
兩者は屢々衝突する、歴史を尊重するものは古制を墨守  
し新發展を妨げる憾がある、しかし理想なき歴史は死物  
であり、新しい歴史は理想によつてつくられねばならぬ  
ミし、「歴史觀」(小野正康、觀想)は支那日本及び西洋に  
於ける史觀の變遷發達の迹を簡潔に敘述し殊に十九世紀  
以降歐米に起つた史觀の種類その由來を説き、最後に個  
人の人格に於ける終局的標準は自由の實現たる國家ミ其  
の特殊化された組織の開展たる國史であるとする見地か

ら國民の人格を形成するものは國史であり、歴史は唯一  
最高の道德哲學であるミ斷じ、「綜合史學の提唱」(野々  
村戒三、學苑)は歴史ミいふ大組織の骨格は歴史現象の  
ある一項のみで説明せらるべきではないミし所謂綜合史  
觀を主張したものであるが其の綜合史觀は集合的心理に  
重きを置き人間生活を集合的のものミ觀察して歴史家の  
任務は人間の生存ミ進歩の爲に働く集團的活動の性質  
を決定する要素を發見し之を評價し且叙説するにあるミ  
してゐる。「文化の受容」(いふこゝに就いて)(關榮吉、社  
會學雜誌)は外來文化の受容、更にそれが刺激となつて  
固有在來の文化が發展する過程を分析し、且、外來文化  
は刺激として如何程の意義ミ價值あるかを説き、「文化發  
達の過程」(其の内面的機構)(小松堅太郎、同誌)は文化  
發展の諸條件上下階級間に文化の移動する要件を論述し  
たものである。

その他に尙「價值自覺」(その歴史)(杉原圭三、哲學  
雜誌)「史眼の養成」(中村孝也、歴史教育)「歴史ミ文學」  
(今井登志喜、同誌)「歴史」に於ける個人の意味(前田幸

太郎、山口高商雜誌）「歴史の解釋と創造」（小西憲三、法政大學論叢）「唯物史觀批判の研究」（久米成次、觀想）「歴史と社會科學との諸關係に關するクルノーの説」（本田喜代次、我等）「歴史學の一考察」（岡本隆男、龍谷大學論叢）等見るべきものは少くない。（菅原）

**國史** 昭和三年を飾りしものはこの秋十一月を期して舉行せられし今上天皇即位並に大嘗の大禮であつた。

それは今し現御神が大御位に即かせ給ふを天下萬邦に示し給ふ盛儀であるが時に我國に於ては長き歴史的背景を有するだけに歴史家のこれに關する研究も少くはなかつた。例へば「御即位大嘗祭の沿革」（江馬務、風俗研究）「即位禮と大嘗祭の沿革」（植木直一郎、國學院雜誌）「古代の大嘗祭」（河野省三、同誌）「中御門院御即位見聞私記」（三木爲次郎、同誌）「大嘗祭の本義ならびに風俗歌」（眞床襲衾）（折口信夫、同誌）「飯豐天皇即位祚辨」（中島悅次、同誌）「貞觀儀式の大嘗祭儀」（赤堀又次郎、中央史壇）「大嘗宮の中垣に就いて」（出雲路通次郎、史林）等がそれである。この外この盛儀の示す意義を一般に普及徹底せしむる意

味に於て國史家の執筆せる論著も數多かつた。

史學に關する展覽會記念祭のこの年度に行はれたものをあげるに三月廿一日から四月廿五日迄大阪朝日新聞社の主催による天平文化展覽會があり之に應じて奈良帝室博物館は四月一日から五月一日迄天平文化記念特別展覽會を開き世上はひさしきり天平文化を回顧した。文明協會は六月廿五廿六の兩日早稻田大隈會館に於て戊辰記念展覽會を行ひ七月十日より東京三越松屋松坂屋に於て南蠻史料展覽會があり同十一日より十四日迄水戸に於ては義公生誕三百年記念祭及遺物展覽會があり八月一日から七日迄は日比谷圖書館の主催による江戸城建築史料展覽會が東京三越及上野自治會館に十月六日七日は橋本左内先生七十年記念展覽會が東京本郷帝大佛敎青年會館に同十七日より七日迄信長時代を中心とする近世國民史展覽會が國民新聞社の主催の下に松屋に於て開かれた。なほその廿六日より四日間東京帝國大學史料編纂掛に於て第十三回史料展覽會が開かれ謙信信玄信長秀吉に關するものを中心として陳列された。十一月十二、十三兩日は京

都帝國大學史學科を解放し特に徳川光圀新井白石に關するもの及京都附近の史蹟研究遺物を一般の觀覽に供したることである。

又新に發刊されたる歴史關係の雜誌として東北文化研究（東北帝國大學法文學部内奥羽史料調査部編輯）史苑（立教大學史學會）國史と國文（國史と系譜改題、立命館大學）を挙げ得る事は史界の進運を物語るものとして心強く思ふ。その健全なる發達を祈る所以である。

一般史方面では先づ單行本として「日本古代史新研究」（太田亮）がある。年代の新研究、耶馬臺國の所在、氏族分布の研究、天神民族の故國、出雲神の研究、九州朝廷の活動、朝鮮史年代の研究と日韓の關係、年代研究最後の斷案の諸篇を含み附録として大歳崩年表、日韓年代對照表、日支韓新舊對照年表がついて居る。序による著者が幼年より懐ける古代史研究の總決算をなすものであるといふ。傳説の核には史實を含むとする立場に於て専ら文献的研究を試み橿原奠都より開化天皇末年迄二百十七年の實年代を經過せりといひ天神民族は始め九州の國に

あり後大和に遷り孝安孝靈兩天皇の頃内亂あり崇神天皇に至りて中興の業成りしが九州の故地には一時卑彌呼の如き女傑を生ぜしも間もなく衰へたこと述べて居る。その

努力の跡には敬服するが結局この研究も氏の假定の範圍内に於て成立するものでありこゝに導き出された結論は直に古代史の諸様相を解決し得ない。それは餘りに古代史の政治的或は年代的輪廓を描く點にその興味が局限されて古代の文化内容に餘りに乏しき關心をもつ爲であるこれに對して「日本古代社會」（西村直次）は所謂文化人類學的立場に於て専ら古代の文化内容を敘述せんとしたものであるがそのいふところ多くは氏が從來研究せる範圍を出でず且つその考察の方法に於て內面的な論理の深さをもたない憾がある。次に「繼體天皇以下三天皇皇位繼承に關する疑問」（喜田貞吉、歴史地理）は先づ平子鐸嶺氏の説を批評し繼體天皇の後、安閑、欽明兩天皇の同時御在位あり宣化天皇は安閑天皇の後を承け給ひしも間もなく崩じこゝに欽明天皇御一統の御代となりしならんこと「天平の文化」は大阪朝日新聞社が催せる天平文化講演會

に於ける諸家の講演を集めたるもの、又「天平文化史論」は雜誌寧樂の増刊なるが共に諸方面より天平文化を研究したものである。「院政に關する一考察」(三浦周行、史學)は後三條天皇の御遜位には一面保養の意味もあるとし眞の院政は自河上皇より始まるがそれは攝關政治の形を變へての延長であり又天皇政治の變態であるとする。

なほ「白河上皇咒咀事件に關する一考察」(吉村茂樹、歴史地理)がある。「日本中世史論」(大森金五郎)は著者の論文集であるがこの種のものとしては牧野信之助の「武家時代社會の研究」を推さなければならぬ。それは法制經濟史上の諸問題、時勢及社會相、土地制度及聚落問題、教界ミ名僧の四編に分れ大小三十三の論説を收めて居るがいつれも中世より近世へかけての社會、經濟に關する眞摯なる研究の集積である。(信濃に於ける甲越關係)渡邊世祐、史學雜誌)は田中義成氏の研究を補ひ川中島に於ける甲越の衝突は天文廿二年弘治元年同年三年永祿四年の四回にして同七年にも六十日に亙る對陣ありました。

「武田信玄の秘喪について」(相田二郎、歴史地理)は秘喪

をした事は事實であるがそれはすでにルーズなものなつたであらうといふ。なほ「近世日本の出立點としての安土桃山時代」その政治思想(内田繁隆、早稻田政治經濟雜誌)徳川時代に於ける積極政策と消極政策(大森金五郎、歴史教育)がある。幕末維新に關しては「ペリー渡來の際に於ける國論の歸趨」(井野邊茂雄、史林)は史家が當時の國論は主戰論にあつたとするもの多きは誤りであり寧ろ避戰論及開國論を多しとすべく開國に同意せざりしものも寧ろ米國に對する政策としての意見に過ぎなかつたとした。「ペリー來航時代に於ける國家意識」(向井淳郎、歴史ミ地理)もこれと併せ讀まるべきものである。「近世に於ける北方問題の進展」(末松保和)は從來局部的に取扱はれし北方問題の統一的な研究として注意すべきものである。「維新前後の政爭ミ小栗上野介の死」(蟻川新)は一種の憤激を以て書かれた書である。この目途するところは小栗上野が幕府に於ける最大の人物であつた事を明かにし所謂官軍がこれを慘殺せる事の非を責めんとするに在る。歴史家は固より一種の憤激をもつがそ

れはかかるものゝ自らその類を異にする。彼小栗が一種の人傑なりし事は人の認る所でありその正しき姿を寫す事は必要であるがその爲勝西郷の諸豪を罵り薩長の態度を悉く私的なりと見ることは自ら維新運動の理解を妨ぐるであらう。「イザーク、テイッツィングの日本研究」(田保橋潔、史學雜誌)は安永九年より天明四年迄和蘭商館長として日本に滞在し二回江戸に參府せる彼は莫大なる日本品を蒐集し日本を研究せりしてその作たる日本風俗雜纂、祕本將軍列傳、日本圖說、佛譯王代一覽を解説せり。この外「高杉晋作、久阪玄瑞等の吉田杉陰苦諫について」(妻木忠太、歴史教育)「維新前後に於ける諸階級の崩壞」(藤井甚太郎、同誌)があり明治に關するものには「明治初年に於ける憲法制定の議」(尾佐竹猛、明治文化研究)「日本憲政に對する御雇外人の貢獻」(吉野作造、同誌)「五ヶ條御誓文の勅問につきて」(藤井甚太郎、同誌)「國會設立請願運動」(川原吉次郎、同誌)「明治初年の東京府政」(菊池慎三、都府問題)「札幌新府の建設」(竹内運平、歴史地理)等がある。法制史の方面では瀧川政

次郎氏の「日本法制史」がある、所謂歴史的法律的立場に立つ研究として又綜合的研究として確かに本年度の大きな收穫の一であつた。「近江律令考」(同氏、法學新報)はその藍本となりしは唐の貞觀令にして律なく令も内容は不明なるも一部分より漸次施行せられしならんとし「大寶律と養老律の異同も論ず」(同氏、史學雜誌)「大寶養老二律の異同論について」(三浦周行、同誌)「再び大寶養老律の異同論について」(三浦周行、同誌)「再び大寶養老律の異同論について」(三浦周行、同誌)「大寶養老二律の比較研究」(同氏、法學論叢)は大寶律に於ける疏の有無と兩者が卷數を異にする理由についての論争であつた「諸陵式に關する」(和田軍一、歴史地理)は陵墓の性質に關する研究である。なほ「三代式選修に就いての私見」(梅本寛一、國學院雜誌)「延喜式の異本及版本に就いて」(同氏、同誌)。「律令時代の土地所有權」(中田薫、國家學會雜誌)がある。「我國に於ける流刑」(小山杉吉、法曹會雜誌)は流刑は政治犯及思想犯に適用せしが上代にその例多きは朝廷寛恕の政の致すところであり中

世に少かりしは亂世の爲一般に嚴刑を以て臨みし事並に流謫すべき土地をもたざりし爲こし又我國に於ては外國の如き目的外の流刑例へば殖民流刑等は全く無かつたこと。〔律令に見えたる教化法に就いて〕（牧健二、法學論叢増刊）は律令は教化を以て基本觀念とせる獨特の法律體系たりしし〔鎌倉幕府に於ける所領給與の制度〕（同人、同誌）は所領給與制度の概念、給與所領の種類及給與手續、御口入の所領及び所領の給替、所領給與制度の變化について論述し「戰國時代の武家知行法」（川上多助、史學）は萩藩閥閥録により毛利氏領内の知行地の給與、相續課役等を研究せるもの「徳川時代の特別民事訴訟法」（金田平一郎、國家學會雜誌）は特に金公事について述べ「名古屋藩に於ける律令學の考察」（藤直幹、史林）は稻葉通邦を中心とする研究にして名古屋藩に於ける律令學者の一團とその研究態度を叙せるものである。なほ「明治初年の入會權」（中田董、國家學會雜誌）「明治裁判物語」（尾佐竹猛、法曹會雜誌）の諸篇があつた。交通史方面では先づ「上代驛制の研究」（坂本太郎）があげらるべきであ

る。驛制は國內交通時代の特徴なりとする見地に於て上代驛制の沿革を叙して居る。整つた研究の一つであるが國內交通と驛制の關係が未だ十分に考察されて居ない。恐らく上代驛制の衰滅に歸せる後と雖も我國は必しも所謂地方交通時代へ逆轉せるに非ずして依然たる國內交通時代であつたこと考へられる。従つて著名は驛制の衰滅と共に國內交通時代も終了せるを證明するか或はこの制度が國內交通と更に特殊なる關係にあるを説明すべきであつたこと思はれる。なほ「古代交通史の問題」（同氏、新輿科學の旗の下）も併せ讀まるべきものであらう。この外「戰國時代に於ける東國地方の宿問屋傳馬」（相田二郎、歴史地理）は特に今川武田氏領内に於ける宿、問屋の性質傳馬の里程、駄賃、手形等を研究した。その他「白河菊多兩關に就いての一二の考察」（丸山二郎、同誌）「再び驛鈴の研究に就いて」（樋畑雪湖、同誌）「足柄峠の一ツ屋」（相田二郎、同誌）がある。又「助郷と農民の生活」（大山敷太郎、經濟論叢）は御傳馬課役の性質、人馬賃錢、幕府の對宿驛保護助成維持策、助郷課役の時代的變遷を述べ助

郷制度は農民の疾弊を結果したが反面交通を發達せしめて經濟活動を盛にしたとし「草津宿に於ける助郷に就いて」黒羽兵治郎、同誌は助郷の意味と其の區別、助郷村の沿革と其範圍、助郷人馬の請負、助郷村の窮迫、幕府の無方策と助郷村の自衛策、宿驛と助郷村の負擔上の關係を述べた、「近世の内國海運」(原與作、歴史と地理)は近世海運の盛大を致せしは徳川幕府の政治的統一と國民經濟發達の爲なりとし江戸大阪間の海運、東廻及西廻航路の發達を見て居る。經濟史方面には「日本經濟史概説第一分冊」(本庄榮治郎)が出たがなほ序説の範圍に止つてゐる。只日本經濟史は我國に於ける經濟社會の發達を叙述するものとなすは著者の結論であるが經濟社會の概念が更に精密に考へらるべきであつたらうと思はれる。その爲この分冊に於て我國の政治社會組織の變遷が述べられて居るがその時代區分の如き内容餘りに明確にして却つて歴史家に疑愼の念を懐かしむるものがある。なほ概説風のものとしては「經濟生活より見たる我國民の發達」(中村孝也、歴史教育)があり古代に關しては「古代社

會に於ける經濟生活の史的經過」(山本勝太郎、三田學會雜誌)「古代經濟に於ける農業の發達」(同氏、同誌)がある。「古代社會に於ける氏族制度と其經濟單位に就いて」(同氏、同誌)はこの經濟單位は部落即ちムラなりとし「社寺領の統制に就て」(中村直勝、歴史と地理)は先づ社寺領發生の形態を分類し次にいかにして統制せられしかを見た。「中世初頭に於ける貨幣流通の展開」(小葉田淳、國史と國文)は主として鎌倉時代に於ける支那錢の輸入とその流通を述べたもの、「近江商人の起源」(菅野和太郎、經濟論叢)は古く商人的素質を有する歸化人が近江商人の根據たる中郡に移住し本國の制度に倣つて市を立てしが帝都に近き地理的關係より大に發展し市座を作り商權を確保し遂に近世に入りて大なる活動をなせりとし「日野商人團の發達」(牧野信之助、歴史と地理)は日野市は鎌倉時代に始ると推定されるが後蒲生氏の保護を受け更に徳川氏の保護により近世に活躍するに至れりとする「近世資本主義の萌芽」(三浦周行、史學雜誌)は産業の發達、商人の活躍、錢貨の流通、鑛山探掘等の諸點より近

世資本主義の淵源を窺はんとし「長崎貿易に於ける近世城下町の研究」(小野均)は近世都市は人爲的に急激に構成されしもの、城下町もその一例にしてその建設の際には人口並に商業的要素の強制的集中が行はれたことして都市計畫及商工業的組織を論じ城下町と地方との關係に卷を終つて居る。城下町成立後に於ける都市の發展は主として商業都市の部に存したが故に維新の社會變革に際し彼等はよく現代都市への轉換をなし得たことする結論は概ね首肯さるべきものであらう。「長崎貿易に於ける銅及銀の支那輸出に就いて」(矢野仁一、經濟論叢)は寛永十四年日本が銅輸出を禁止せしは探掘高少く輸出による減少が直に市場に影響する程度なりし爲にしてこれ蘭人には大打撃なりしも支那人に比較的影響少なりき。而して正保三年この禁を解かれしは支那が順治二年より日本銅を採辦せるに關係あるべし。蘭人の銅輸出は明曆二年より激増せしがこれ寛文の銀輸出禁止の結果なり、次に銀は支那人の最欲するところにして彼が外國貿易をなせるは主として銀の獲得する爲なるが慶長元年より正保四年迄

に日本より支那に輸出せる銀は十六萬千六百四十七貫目なりといひ「貞享以後の長崎の支那貿易に就いて」(同氏、同誌)は貞享二年幕府が貿易額を限定せしは市法貨物商賣法を廢止せる結果支那人の利益増加せる爲彼等が無制限の輸入をなし利を貪る虞れありし爲であつたがこの限定は少數支那貿易家の大利を結果せし爲競争激しくなり却つて入港船を激増せしめ一面密貿易を盛ならしめ元禄元年入港船數を限らしむるに至れり。この時支那人の居住地を一定したりしは切支丹及密貿易に備ふる爲なり。正徳新例は密貿易禁止の爲であり貞享より正徳に至る間こそ日支貿易史の第二期を爲すものとした。「江戸時代に於ける銅錢の海外輸出に就いて」(岩生成一、史學雜誌)は江戸時代初期我が經濟圏は著しく膨張し遂に南洋に及び前代より蓄積されたる銅錢はこの擴大せる我が經濟圏内に流動し或は通貨そのものとして又は鑄造原料として廣く海外市場の需要を満したと見る。「徳時代の寺社名目金」(堀江保藏、經濟論叢)はその起原は祠堂金及官金にありしその仕組錫付法利害及幕府の對策を明治に於ける

その禁止を見た。「日本經濟史研究」(幸田成友)は多年の論文を集めたもので米切手札差雜考、質屋、富札、髮結床、天保改革の一節、株仲間の解放、御買米と御用金、天保十四年の御用金、武士と町人、天保人別改令、非人寄場、彈左衛門の牛計、江戸の名主、徳川時代の大阪市制、日本經濟史上の大坂の諸篇を含んで居る。日本經濟典籍考(瀧本誠一)は經濟典籍の解題集である。(舊佐加藩の均田制度)(小野武夫)は幕末に於ける注目すべき施設としてこの藩の均田制を研究したものである。社會に關するもの、「古語拾遺の研究」(津田左右吉、史學雜誌)は忌部は巫祝や神職の一般的稱呼ではなく朝廷の神事にあづかるもの、特殊の名稱でありその忌部の中からそれを氏の名とする家が生じ地方で忌部と云つたのはその部下でそれ自らは神職に非ずして忌部氏の爲に織物や木材や建築なぎの事をして居たものとし一般の伴造も略同様にして孰も朝廷に於て何等かの地位と職掌を有するものであつて即朝廷の制度として在存せるそれとの部の首長であり地方に於て各農民を領有せしものなりとした事は氏

族制度の考察に於て確かに一の見識といはねばならぬ。

「百姓一揆の研究」(黒正 巖)は著者が多年に亙る百姓一揆研究を綜令せるものとして注意すべきものであり以てこの方面に於ける白眉とすることが出来る。徳川時代の封建社會はそれ自身に包藏する自己否定の矛盾によつて必然的に崩壞過程を辿りしものにして百姓一揆はこの崩壞過程に現はれたる派生的附隨的現象にすぎずそれ自身能動的に社會組織の變革をもたらず性質を有せず且つ又一の統一的社會運動としての革命的性質をもたないものとするその所説は百姓一揆の本質に關する最正しき觀察であると考へられる。「封建社會の統制と鬭争」(黒正 巖)は前後二編に分れ第一編に於ては封建社會に於ける經濟統制を説き第二編に於てその社會鬭争を叙して居るが後者の内容は全く百姓一揆に關するものである。なほ「百姓一揆發生の季節」(同氏、經濟論叢)「幣制の紊亂に基く百姓一揆」(同氏、同誌)「專賣類似の仕方に基く百姓一揆」(同氏、同誌)「越後の百姓一揆」(同氏、歴史と地理)がある。「奥羽諸藩に於ける赤子養育法」(本庄榮治郎、經

濟論叢）は徳川時代の後半期には人口制限行はれぬ政者は對策に苦心したが奥羽諸藩に於ては信仰、教諭等の精神的感化法又は手當米育兒金等を與へ或は刑罰により之を防止せんとした。（肥後）

東洋史學者には、「支那の史料に現れたる我が古代」（橋本増吉、史學）の有様を、比較的、た易く闡明し得る便宜と共に、更に、我が古代史上の疑問を、その裡に、支那文化の影響を認識する事に依つて解決し得る或る程度までの可能性が惠まれてゐる。「神代の國號考」（白鳥庫吉、史苑）の如き、恐らくは、後者のよい一例であらう。これは神代史の中の、葦や桃についての思想を分析し批判し、その源流を支那の陰陽五行の思想に求めた結果、葦原瑞穂國といふ國號は、漢文化の這入つて來た後でなければ起り得ないとし、又、神代史に現はれてゐる宇宙觀即ち大八洲に對し、唯、之を垂直的に對立する國土のみを認めてゐる事實——によつて理由附けられる（葦原）中々國といふ國號は佛敎の渡來した後でなければ現はれ得ないとするものである。言ふ迄もなく、東洋史

學者としての日本史に對する關心は、主として、日・鮮・漢三者を通じての、或ひは各二者相互間の、文化交渉及び外交通商の關係へを向けられざるを得ない。最初にこの第一の觀點から、若干の論文を讀んでみるに、先づ「日本固有文化についての疑義」（多屋頼俊、歴史地理）を論じて、我國の文化には、日本固有を名付ける可きものは一つもないと斷ずるものや、それは反對に「日支親等制の比較」（牧野巽、民族）を行つて、普通に、外來的影響に對して、最も抵抗の強いものといはれる親族法が、支那から我國に輸入された際、我國固有の親族制度から受けた抵抗は、果して如何なるものであつたかを研究したもののなきが注意を惹く。その他、或ひは、神話時代から推古朝までの「日支交通の資料的考察」（水野梅曉、支那）を試み、或ひは「魏志倭人傳の「生口」（中山平次郎、考古學雜誌）を以つて、男女各々其の分に應じた諸工業を、支那へ習得しに行つた人達を考へて、我が國古代に於ける支那文化流入の形式を察し。或ひは「漏刻について」（兒玉明人、中央史壇）のそれと共に、「古き漆工藝の

來由に關して(六角紫水、同誌)、その年代を究めるもの  
なき、きりぎりしに面白い。進んで「由文學上所看的中日  
的關係(鹽谷温、斯文)を察すれば、前後二千年間の、そ  
の歴史は、大別して、第一期文物輸入時代、第二期佛教  
輸入時代、第三期漢學輸入時代、第四期新學輸出時代の  
四つにする事が出来る。此の第一期は、推古天皇より奈  
良平安朝に亘るものであるが、恰も、此の時代に編まれた  
「萬葉集の漢文漢詩」(林古溪、斯文)の多くは、概して、文  
選・詩・書・易・論語、乃至は玉臺新詠・游仙窟なきの模倣、  
それも極めて拙い模倣であるに過ぎない。又、我が國に、  
多數に現存する佛像の遺物を、理窟から離れて、その有  
るが儘に看て見るに「推古時代に於ける造像の起原に就  
いて」(石崎達二、大谷學報)は、之を二大別し、一を六朝  
式、他を唐式とするこゝが出来ると言ふ。日支のそれば  
かりでなく、「飛鳥奈良時代に於ける日鮮文化の交渉」(石  
田茂作、考古學雜誌)を、遺物及び文獻の上から研究し  
たものもある。さて此の様に、日鮮支の文化交流の跡を  
考へて來ると、「日本に温突は傳つたか」(藤田元春、歴

史(地理)といふ疑問も、至極尤もの事に聞かれるが、  
茲では、たゞ「日本で朝鮮の國祖といはる、檀君を祀つた  
神社」(加藤玄智、宗教研究)や、「朝鮮色を持つ九州玉山  
神社の研究」(手塚道男、神社協會雜誌)が行はれ、殊に  
は、支那國民が、未だ會つて神として祭つた事のない「孔  
子を祭神とする神社」(服部宇之吉、斯文)が二つまで紹  
介された事を留意するに止めて置かう。尙、その傳來を  
考へるものには「算盤考」(兒玉明人、中央史壇)があつた。  
次に、外交通商に關するものでは、支那側の記録から、  
喧しい「足利義滿冊封問題に就いて」(後藤肅堂、東亞經  
濟研究)の再批判を試みたものがある。所謂、日本國王  
は、金印は受けてゐても、誥命は貰つて居ない。又、日  
本の使者は、使臣といはれてゐても、陪臣とはされてゐ  
ない。新曆は恵まれてゐても、大統曆の頒施には與つて  
ゐない。加ふるに、明の歐陽鐸の奏疏には日本於國家雖  
「非請封受冊頒曆朝正之國」に見えてゐる。従つて、明の  
方から義滿を冊封した事實は認められないといふのが、  
其の要點である。「倭寇風俗考」(同人、中央史壇)と共に、

文章が、頗る碎けてゐる。時代を降つて、徳川期の主として、對支貿易を取扱つたものには、「永祿寛永時代の長崎の支那貿易について」〔矢野仁一、東亞經濟研究〕「長崎貿易最隆盛時期の支那輸入貨物に就いて」〔同人、同誌〕「貞享以後の長崎の支那貿易に就いて」〔同人、經濟論叢〕「長崎貿易に於ける銅及び銀の支那輸出に就いて」〔同人、同誌〕の四姉妹篇がある。〔安部〕

文學方面では、國語と國文學の日本文學の胎生號は近時の古代文學に對する關心を物語るものとして注目される。「日本歌謡の原始形に關する二三の考察」〔西村真次〕には日本歌謡を人類歌謡の一部とし、その發生の考察から日本歌謡の原形を理解せうとする。文學の發生を一般に律文が散文に先立つてふ假定に立つて、吾國古代歌謡が宗教的性質を含む點からその原形を祝詞の古き形に認めて、尙琉球に傳る古謡、吾國の童謡から古代歌謡のもつた旋律を推定せうとする。研究能度の自由さが新らしさを持つて人を捕へ易いが然し古代に於て一般に言語そのものが呪術的性質を有つた事が信ぜらるゝ時、尙文學

の發生形式を問題とする立場にあつては、歌謡に宗教的意義ある事を更めて説くよりも寧ろ呪術的性質を持つ言語が何故に氏の説かるゝ如き形式で表現されたか、問題とされねばならない。律文が散文に先行するてふ氏の據つて立つ假定が根本に考へられねばならぬ問題である。歌謡が原始社會人の間に持つた役割り―音樂、舞踊との關係でなくてその發生研究を力説し動物の歌謡との比較にまで遡るべきを提唱しつゝ、吾らの歌謡を説く時には歌謡の形に整へられたものゝ意義を説明するのは矛盾である。「日本文學の起原の概念」〔小山龍之輔〕にも文學發生論が種々紹介批評されてゐる。然しこゝではたゞ歌謡發生の動力のみ説かれて何故に歌謡の形式で表現されたかには論及されない。發生を考ふる時動力が先づ考察されるべきは勿論であるが然し同時にそのもつ特殊なる形式に就いての考察も要求される。民族學の著しい進歩は古代學に革命的な飛躍をあたへたがその功績の大なる丈けに超ゆべからざる限界をこえて、あらゆる分野の解釋を試みやうとする功罪が論ぜらるべきである。「日本詩歌の

母胎への考察(高木市之助)にこの抗義が提出され歌詠の旋律が克明に分析されて形式論への貢献を持つ。外に「創造神話の一考察(大西貞治)」「日本精神と古事記の成立(倉野憲司)がある。」「自然愛と日本文學(福原武同誌)」には文學と國民性、その社會性が論ぜられる。自然の所與なる國民性が自然に對する自覺の發展を文學作品に辿り、文學をその持つ社會性を通して變轉の理由を求めやうとする注意さるべき方法が試みられてゐる。然しこゝで意味さるゝ社會性とは時代精神との關係——歴史的個性てふものでない。たゞ作者の社會的地位の變化が文學に及ぶ影響が論ぜられるのみである。かゝる態度が寧ろ文學史家美術史家等専門家の間に往々見出さるゝのを注意しなければならぬ。「明治文學の回想(藤村作、同誌)」には明治新政の基調であつた政治的にまた社會的に新奇なるものを求むる心が青年の間にはたゞ社會的欲求に満足せず絶對の世界に憧るゝ心から浪漫文學の誕生をなつた事が啓蒙的に論ぜられる。その外に「萬葉集の基礎研究(國語國文の研究増大號)」「萬葉雜話(井上通泰、アラ

ギ)」「萬葉集私見」「土屋文明、アラ、ギ)」「民謠としての東歌に就いて」「市川寛、國語國文の研究」「祝詞考説(倉野憲司、國語と國文學)」「國文學に現れたる龍(山崎麓、國學院雜誌)」「西行の道(片岡良一、思想)」「史學上より見たる戰記物語の和歌(高木武、史學雜誌)」「六條家の歌學と其歌學思想(能勢朝次、國語國文の研究)」「藤原定家の家歌思想(谷鼎、同誌)」「二條良基を中心とした連歌道の建立(福井久藏、國語と國文學)がある。學術方面では「徳川光圀と其修史事業(三浦周行、史學雜誌)にはその修史の動機と抱負、史官の拔擢と優遇、史料の蒐集編纂準備の頂において修史の苦心を偲び、修史の功過を論じてはその持つ道德的科學的批判に對して鋭きメスをふるひつゝ、尙深き敬慕の情を寄せて生誕三百年記念の年を意義あるものとした。「水戸義公(同人、改造)も併せ讀まらるべきである。「近世史學史上に於ける國學の貢獻(村岡典嗣、史林)には、近世初頭史學の特色として史は實によつて後世の鑑戒をなすてふ思想から脱却しえず、故に最も科學的なる新井白石の求めた實も常理で以て解釋

しうる事を標準として時代によつて異なる歴史個性を理解せず、之に對して本居宣長が古意を求めて紀よりも記を、榮華よりも源氏を撰び時代精神を正しく理解せうとする態度に文化史的把握を見る、然し各時代の純粹性を信じそれを一の完成したものと見て發展の姿を見なかつた點に史學への直接の貢獻を持たないで伴信友に於てかゝる古代精神の展開が論ぜられたとする。尙「古事記傳の天覽について」(彌富被摩雄、國學院雜誌)「鈴木重胤學說」(星川清氏、同誌)「北村季吟著述目錄」(岡田眞、アラ、ギ)がある。「宋儒新註書の傳來と其普及」(大江文城高瀨博士選歴 支那學論叢)には最初の傳來を俊彥とする說に對して通憲賴長らの時既にその傳來の根柢を認めて、岩崎文庫藏中庸章句寫本奥書に正治三年三月四日大江宗光とあるものから俊彥以前傳來説を確立し鎌倉後期以降の力強い普及の有様が見られる。「崎門學の主張」(同人、斯文)にも眞摯な研究が見られる。教育方面では「平安時代の學習内容」(高橋俊乘、歴史と地理)は源氏狹衣らに描かれたイデーの人物のもつ學問によつて當時男女の學習内

容を見んとする。「平安朝時代の女子教育」(岩井良雄、教育研究)にも同様の觀察が試みられてゐる。菅公と和魂漢才(山本信哉、國學院雜誌)は菅公遺誠の僞作説あるに拘らず尙和魂を尊ぶ思想を大鏡榮華物語から見て菅公の行爲は悉く和魂の實踐であるとする。「菅公遺誠と和魂漢才」(彌富被摩雄、同誌)には六人部是香の説によつて和魂漢才の語の谷川士清日本書紀通證の文からの捲入なる事を指摘した。「和魂漢才說に就て」(再び和魂漢才に就いて)「秋山角彌、同誌)がある。「伊藤仁齊に於ける古義思想の發展とその上に立つ教育思想」(加藤仁平高瀨博士選歴 支那學論叢)には堀川塾に現存さるゝ史料の斷簡をも見逃さずに主として成人期までの古義思想の發展をたさる。「中江藤樹と其教育」(加藤盛一)にも傾聴すべき思想が容られてゐる。風俗方面では「風俗の流行と變遷」に就て(江馬務、史林)が注目される。風俗變遷の動機を法制的と模倣的の二に求めてゐる。風俗如き外形的のものはその變遷の一半を法制の力に歸するのは誤らない。然し斯くて成された變化は模倣によつて生じた社會風潮

ミ性質上當然區別さるべきであり、それをも流行の語で呼ぶのは當を得たものミは考へない。又模倣の源泉を社會の權力あるもの、上に置かうミするのは模倣方則の不思議を思はぬものである。模倣性は魔術の如く社會人の心を捕へる。氏は『風俗の流行は流行させんミして流行せず流行を豫想せずして流行するミいふ不思議な現象を呈するものである』てふ氏自身の言葉の中に含む意味を考へなければならぬであらう。風俗はその性質上社會風潮の尖端に立ち社會の動きを鋭敏に物語るものがある。それだけまだ深き考慮を以て單なる外面的變遷のみでなくその機因を探らねばならない。風俗も亦人間生活の一分野である上はかゝる事を考へさゝれ、この論文の取扱ふものを興味あるものミ思はれた。この意味で「職人風俗の變遷」(同人、中央史壇)が興味を惹く。一般民衆風俗を研究對象とし三期に分けて(一)平安朝迄は支那風の影響裡にある朝臣ミ關係なく古代風俗の保持され(二)鎌倉武士ミの接觸によつてその風を受けて古風ミの折衷がなされ(三)徳川時代町人自體の風俗が社會の精彩ミな

つて獨自の發達を遂げたミする。庶民文化が各時代に占むる位置を考ふる上に多く參考ミさるべきものであらう。「職人風俗繪」(中央史壇)は繪卷物屏風繪等から種々職人風俗を示すものが撰ばれて簡明な説明ミ共に一般智識を得る上に便宜な企である。「俠客の研究」(江馬務、風俗研究)は俠客の起原を戰國時代浪人が存在の爲團結し平和の時代にもそれに順應せず武士的氣質を養つた、それが後に通人氣質ミなり又種々職業の人に受けられて江戸人の氣風に影響を多く持つた事を説く。外に「繪合に就いて」(和田英松、國華)「白拍子管兒」(櫻井秀、中央史壇)「屠蘇の研究」(江馬務、風俗研究)「門松ミ松門」(中島棟、史學)「祇園山鋒の研究沿革」(若原紫明、風俗研究)「大阪歳事志」(佐古慶藏、同誌)がある。歌舞音樂方面では「舞樂に就いて」(那智俊宣、風俗研究)「越後に於ける歌舞調査資料」(田邊尙雄、國學院雜誌)「東勝寺物語ミ辛若舞の曲名」(岡田希雄、國語國文の研究)「日本に於ける人形芝居發達の過程」(能村潔譯、國學院雜誌)がある。美術工藝の方面では繪畫に「正倉院の彩繪佛像幀に就いて」

（源豐宗、歴史ミ地理）の制作が天平時代ミする通説に對して抗議を出しそのもの情趣、様式、形式等の方面から否定し貞觀様式のものミし豊富な例證が擧げられて貞觀佛像に就いての種々の智識を提供する。北野天神緣起の印象（大塚保治、思想）に描れた場面の一々に就いて情理を盡した批評が試みられ、先づ描れた地獄の圖については他の地獄相圖ミ比較してその根本相異を指摘して筆者が地獄に就いて嚴肅に本質を描かうミした態度を推賞し、人間苦を端的に描きつゝ恐怖感ミ美感ミの渾然ミした調和を見、全卷を通じて描寫の能度が本質的、直接的であり寫實によつて更に精神を描いた風格の力ミ大さから筆者の人格を思ふて道德的實行的な人格を推定してゐる。繪も亦人格の一の現れであり描れた美も個性を持つ故にそれを感じて筆者の内の生活にまでも立入つた理解の深さにはまた論者の謙虛な心さへも偲ばれて、文化作品に對して餘り安易な歴史家の態度に反省さゝれるものがあつた。「大和繪肖像畫に就いて」（熊谷宣夫、國華）には鎌倉以前の肖像畫が宗教的崇拜の對象ミされ、從つ

て個性を超えた典型が描れたのに對して、朝廷を中心とする年中行事の描寫から個性を描く肖像畫の發展を見る「若沖（谷川徹三、思想）にも藝術作品に對する一の觀點が提唱される。『われ（個性）に對する『われら』社會的歷史的條件』を見、『われら』ミ關係づけて『われ』のもつ意味を評價せうミする。若沖の繪の持つ冷さミ固さの中にも感じる強さを彼が支那的なるもの、追求から理解し、共に存在した他の様式ミの對比からその歷史的意義を決定する。この方法は前に『自然美ミ日本文學』で考へた如く正しく文化史的であるかに見える。然しこゝで説かるゝ『われら』ミは『われ』が社會ミ持つつながり―自然的な、偶然的な―に意味される。その觀點は繪畫も彼個人の經歷によつて支配さるが如くであり。時代ミの内面的なつながりには主きが拂はれない。然し史家の考ふべきは若沖の繪に潛む時代の個性である。時代精神ミ若沖個性ミのつながりが最も考へられねばならない。彼のもつ特性が古い支那畫を研究した故に生じたミするのみでなく尙左様な特殊の姿を生み出す時代の姿が有りはしな

つたかゞ多く關心を持たるべきであらう。外に「當麻曼荼羅の下張繪」並に裏板曼陀羅に就いて「瀧精一、國華」藤原時代の繪畫に於ける自然景の描寫（源豐宗、佛教美術）宗達筆西行法師繪詞に就いて（藤懸靜也、國華）「又兵衛の特長を論じて毛利家の源氏繪に及ぶ」（瀧精一、同誌）「彦根屏風に就いて」（藤懸靜也、改造）がある。彫刻では「飛鳥寧樂兩時代の彫刻概觀」（關野貞、思想）には兩時代佛像彫刻の様式形式材料の問題が簡潔な筆致で要を盡されてゐるが、たゞ美術考古學の範圍に止れるも止むを得ない。この不満は「朝鮮の佛像彫刻」（源豐宗、同誌）でやゝ満たされるかに見える。朝鮮佛教美術は日本と共に支那文化の息吹きのうちにな長しその大なる文化潮流に合一しつゝも尙國民性に根ざす美の創造を成し遂げる。この美の追求を志す本論文は藝術を「ミコころ」によつて理解せうとする方法論の實踐としての意義を擔ふものである。然し資料設定についての不安から仕事の困難さと思はす。「天平時代の藝術」（瀧精一、國華）には時代の思想の焦點として東大寺を視る。良辨を中心に隆盛し

た理想的審美的な華嚴經が人々にイデーを與へそれが毘盧遮那佛として藝術的表現をこるこし、當時の佛教藝術の缺點として典型的である事は形式主義への危険を含み史的表现に乏しい事を擧げる。後者は注意さるべき事である。尙外國文化受容の態度と受容能力とが考察される。外に「推古佛の考察」（大口恭助、同誌）「宇佐八幡と豊州の石佛」（松本榮、國華）「中尊寺の佛像」（源豐宗、佛教美術）がある。建築では、「平安様式佛寺建築に影響する邸室建築性の一面に就いて」（服部勝吉、歴史と地理）が平安朝初頭佛教が宮室と離れて山門に獨自性を保たうとしたのがまた次第に之と近づいて邸室を捨て、家こし寺を家と並置するに至つた經過を説いてゐる。これはまた佛教そのものもつ社會的性質を考ふる上にも注意される。最初教學として存在したものが人の生活と直接の係りを持ち人々の日常生活が佛弟子としての行となる。佛教は社會生活の悉くに侵透した。阿彌陀佛をまつる御堂の前の蓮華池に龍頭驗首の船を浮べた人々の心もこの邸室が寺院であり寺院が邸室であつた事を思ふと理解される。

外に「興福寺建築論」(大岡實、建築雜誌)は興福寺堂宇全般に亙る建築の古記録が丹念に涉獵され、正福寺佛殿の建築に就て「田邊泰、同誌」「日光東照宮の寛永造營に就て」(大能喜邦、同誌)「室町時代書院の一遺構に就いて」(服部勝吉、歴史と地理)「飛彈の民家」(藤田元春、同誌)「日本に温突が傳つたか」(同人、同誌)がある。工藝では「武藏野の原始織物を尋ねて」(菅原一、中央史壇)「日本古代のガラス製造」(後藤守一、同誌)「密陀僧に就いて」(上村八郎、佛教美術)「道入以後」(奥田誠一、思想)「刀劔目利の源流附相州鍛冶補考」(小川琢治、史林)「聚珍堂活版」(天龍開山御歌)「日下無倫、藝文」がある。庭園では「桂離宮の傳統的庭園論を排す」(外山英作)が小堀遠州説に對してその傳説資料を検討して信ずべからざるを説き「山本道尙の築庭に就いて」(同人、同誌)に傳ふる所乏しき人の生涯研究の一步がある。「藤」

次に宗教方面では神社、神祇、祭祀に關しては「神社の本宮と奥宮」(三上左明、歴史と地理)は山上幽玄の地に祀られる奥宮、山宮、元宮、古宮と稱せられるものは、

山麓に祀られる其社の本宮、本社、里宮と稱せられるもの、もこの宮居であつて、本宮、奥宮間に行はれる神幸祭なるものは、祭神が奥宮から本宮へ遷座なつた時の祭禮の遺風であるを述べ、「山神考」(藤田元春、歴史と地理)は之に對し我國古代の人々が山の神として祭つた神社もしくは宮居は決して奥深い山に鎮座されず、主として山の口に於て祭祀されたものであるを考へるを説き「祭祀を通じて見たる賀茂社」(座田司氏、歴史と地理)は賀茂神に對する信仰は平安奠都の前と後とに大なる相違が認められる。即ち奠都以前は單に賀茂氏並に之れを中心とする種族の祀る氏神に過ぎなかつたが奠都後には皇室の産土神とし崇められるに至つた。それ以來賀茂祭は國家的色彩を帯びた祭祀の形式となつたを述べ、「中古に於ける宇佐神人の活動」(西岡虎之助、史林)は先づ對朝廷の活動は中古初期の現象で、主として神宮が中央帝都に乗り出し、根據を茲に据えて大に政治的に活躍せんことをしたもの、様であるが、結局失敗に終り、其後は之をせぬやうになつた。次に太宰府との葛藤は中古中期に於け

る著明な現象で、その動機ミ性質は略ぼ南都北嶺の神人大衆ミ朝廷ミの場合に類似し、その結局は是非の有無に拘らず概ね太宰府側の敗に歸し、府司は罪せられた。次に神宮内部の争は中古を通じての現象であつたが特に中期から末期にかけて著しく、その争の原因は神宮にあつては宇佐大神二氏にまつはる大宮司職の争奪にあり、彌勒寺にあつては其の所帯の競望にあり、而も後者は彌勒寺が石清水別當家の支配を受けるに至つて甚しきを加へた。次に神宮の神人ミ、彌勒寺の大衆ミは一體ミ見做すべく、何れか一方に事あれば常に參加し、時には所在に廣がれる末宮末社のそれも響應して、爲に九州一圓をして混亂状態に陥らしめた。次に中古末の源平合戦は神宮に對し未曾有の大打撃を與へたから神人の活動の上にも此機を界さして變化を齎らしめるこゝとなり、これ以前即ち中古の神人の活動は、不自然な時代區分を用ひずして自ら一纏をなし居る云々ミ述べ。其他「氏神ミは何ぞ」(太田亮、國史ミ系譜)「氏神産土神研究上の新舊兩時代ミ古社探求上に於ける古天神の位置」(同人、同誌)「出雲

大社祭神に關する疑義」(同人、同誌)「石上神宮ミ物部氏族」(同人、同誌)「稻荷神の鎮座ミ其初期信仰に就て」(羽倉信一郎、神社協會雜誌)「關東に於ける鶴岡八幡宮の勢力」(古文書より見)「堀田璋左右、歴史地理」(鶴岡八幡宮領に於ける分社の一例)「宮地直一、國學院雜誌」(會根天神ミ靈松)「會根研三、同誌」(北野天神に關する管見)「座田司氏、中央史壇」(中世社寺の賽錢)「相田二郎、神社協會雜誌」(徳川時代の社名目金)「堀江保藏、經濟論叢」(西宮夷神ミ傀儡師)「吉井良秀、歴史ミ地理」(稻荷神社資料)「栗野秀穂、史蹟ミ古美術」(松尾神社本殿の遺墨につきて)「阪谷良之進、史林」(上州世良田の東照宮ミ長樂寺)「古谷清、史蹟名勝天然記念物」(鷹山公ミ白子神社)「米澤敬士、神社協會雜誌」(朝鮮色を持つ九州玉山神社の研究)「手塚道男、同誌」(日本で朝鮮の國檀君を祀つた神社)「加藤玄智、宗教研究」(古代の大嘗祭令義解に對)「(河野省三、國學院雜誌)「大嘗祭の沿革及儀式」(佐伯有義、同誌)「即位禮ミ大嘗祭の沿革」(植木直一郎、同誌)「貞觀儀式の大嘗祭儀」(赤堀又次郎、中央史壇)「大嘗祭に就て」

(八束清貫、神社協會雜誌)「大嘗祭に用ひらるゝ小忌衣に就て」(江馬務、歴史と地理)「我が國體より觀たる御大典の精神」(山本信哉、國學院雜誌)「例幣使と例幣使街道」(中山太郎、歴史地理)等があり、神道に關しては、神道に就いて(琴陵光照、神社協會雜誌)「林羅山の神道説」(田中義能、東亞の光)「山崎闇齋に於ける神道的意識の發達」(小林健三、歴史教育)「葱嶺雜編と其の神道觀」(會根研三、神社協會雜誌)「明治神道史の一節、神祇伯再設問題に就て」(山口銳之助、同誌)、「神道方面に於ける明治戊辰の回顧」(神崎作、中外日報)等がある。佛教に就ては「初期の日本佛教」(京口元吉、現代佛教)は飛鳥朝に於ける佛教は現世功德の爲めの祈禱教として受容られ保護せられたことを述べ「本邦儒佛二教の關係について」(岩橋遼成、同誌)は我國に於ける儒學の發達に佛者の功績は顯著で、聖德太子は其の第一人で、空海が儒老釋の三教兼學の學校を建てたのは儒學研究を一般社會に普及するに大功があつた、遣唐使廢止後、支那文化の輸入に努力したのも多く佛教家であつた。而して平安末に至るま

での儒家は皆佛教を信仰して居つた。鎌倉時代より徳川時代迄は儒學の研究は全く佛教家の手に移り以て徳川時代儒學全盛の基を成した。然るに徳川時代の儒者が多く佛教を攻撃したのは儒學發展の歴史を無視したものである。述べ、其他「法華義疏を通じて聖德太子と大陸佛教との關係序説」(花山信勝、宗教研究)「聖德太子と三經御講談に就て」(藤村雅道、鶉故郷)「聖德太子維摩經義疏所依の註疏について」(寺崎修一、宗教研究)「光宅の天台及び聖德太子に及ぼせる影響について」(幸村法輪、同誌)「平安朝の佛教文化」(蓮沼文範、國史と系譜)「神佛習合に關する一面の考察」(本多辰次郎、國學院雜誌)「花園上皇と禪宗」(栗野秀穂、史蹟と古美術)「建武の中興と禪宗興隆の教旨」(倉光活文、禪の研究)「徳川初期の神佛衝突史料としての遠山事件」(木村定三、史學)「徳川時代に於ける專修念佛勸化の一考察」(井川定慶、藝文)「既成宗教の衰微と低級宗教の流行」(布川靜淵、丁酉倫理會倫理講演集)等があり。經論に關しては「禪籍傳來考」(禿氏祐祥、龍谷大學論叢)は我國へ禪籍を請來し其の書名の分明せ

るは天台の最澄圓仁圓珍及び眞言の惠運の齋らしたものが最も早い、又白河天皇頃に成尋も禪籍を傳へたこと並べ其他「唯識論疏の古寫本及古版本に就きて」(生桑寛明、現代佛教)「妙徳寺の大般若經に就いて」(富水老漁、伊豫史談)等があり。寺院に關しては「法隆寺移建論」(田村吉永、現代佛教)は此寺に就て再建、非再建の兩論あるに對し、金堂内の藥師三尊及び釋迦三尊安置の位置等より見て別に移建説を立てたもので、同寺は天智天皇九年に燒失し其の再建に際し他の推古時代の建築物を移建したもので、それは恐らく法輪寺であり、其の移建は和銅元年頃であらうと説き、「藥師寺講堂の藥師三尊に就いて」(同人、同誌)は、之は古の平城京右京九條三坊にあつた一寺、恐らく殖槻寺の本尊であつたのが、其寺が衰微して土中に埋れてゐたのを筒井順慶が掘出して、其地が藥師寺の所領であつたから同寺に移し入れたものであらうと云ひ、「藤原忠平の法性寺」(藤原道長の五大堂)(京都府史蹟勝地調査報告第九冊)は法性寺の位置を其後に於ける藤原氏の信仰を説き、五大堂の佛像の遺れるを考證し

てゐる、其他「崇福寺跡の發掘を見る」(西田直二郎、龍谷大學史學會々報)「東大寺大佛」(宇佐八幡)との關係に就いての一假説(土田杏村、現代佛教)「淡路國分寺遺址」(魚澄窓五郎、史蹟名勝天然記念物)「香山藥師寺に就いて」(板橋倫行、史學雜誌)「山王廢寺趾の塔婆心礎に就いて」(諸田八百七、中央史壇)「河州小山善光寺本尊佛及び二三の奇古佛に就て」(特に善光寺史の方面より)「坂井衡平、同誌)「鬼室集斯」(其居住地に就いて)「江州石塔」(石崎達三、歴史と地理)「龜山天皇」(南禪寺)「細野南岳、禪宗」(清瀧寺の沿革)「鶴飼堯雅、下野史談)「諸大寺の勢力に就いて」(西光義遼、歴史と地理)「寺域に於ける殺生禁斷に就いて」(荒木良仙、現代佛教)等があり、僧傳に關しては「通海權僧正事蹟考」(小嶋鉦作、歴史地理)は醍醐三寶院の通海が大神宮法樂寺を根據とし、法樂を基調として伊勢に於て活動し、大神宮法樂寺を中興し、同宮法樂舎を設立し、大神宮風社の昇格及び造營に盡力し、龜山上皇の異國降伏御祈願に際し仰を奉じて大神宮に參向して内法につきて祈禱した事等を述べ、彼は中世の宗教的事業家として又

宗教思想家として宗教史上特異の地位を占有するものであること説き、其他「寧樂詩僧傳」(橋川正、歴史地理)、「國珍と空海との血縁關係に就いて」(澁谷亮泰、歴史地理)、「室戸崎と弘法大師」(竹内吉次郎、土佐史談)、「西行の道」(片岡良一、思想)、「慧信尼追考」(日野宗玄、中外日報)、「一遍上人神勅念佛史考」(澁谷亮泰、歴史地理)、「日蓮上人の時代と背景」(辻善之助、國本)、「日蓮聖人の思想と生涯」(里見岸雄、日本文化)、「日蓮の眞言排撃」(市村其三郎、史學雜誌)、「伊豆に於ける日蓮上人」(小林一郎、法華)、「作歌を基調として見たる宇津宮蓮生法師」(高橋諦秀、龍谷大學論叢)、「存覺上人と佛光寺了源との關係」(内田舜圓、同誌)、「畫僧明兆」(粟野秀穂、史蹟と古美術)、「鄂隱和尚行錄に就いて」(堀中哲一、禪宗)、「實叡の『地藏菩薩靈驗記』の著作時期に就いて」(福井廣濟、龍谷大學論叢)、「蓮如上人の妻」(和田占水、中外日報)、「證如上人書札案に就いて」(西光義逸、龍谷大學論叢)、「慈雲尊者の母」(新村出、中外日報)、「畫僧雲室の自傳」(禿氏祐祥、龍谷大學論叢)、「徹定上人と願海阿闍梨」(逸木盛照、中外日報)等があり

宗亂に關しては「天文法華亂」(岩橋小彌太、歴史地理)、「一向一揆の元寇下間連應に就いて」(和田占水、中外日報)等がある。基督教に關しては「日本切支丹と羅馬教皇との文通」(バルベリニ文書の署名者とその運命)、「姉崎正治、史學雜誌」は一六〇七年(元和三年)羅馬教皇パウロ五世が教書と訓示を日本の教徒に贈つて迫害に苦むのを慰問した。其の教書は殆んど日本全國に配布されたいが、奉答文は長崎、有馬地方、中國と四國、京阪、及び奥羽の五ヶ所から出た。だけは確である。其の五通の奉答文の署名者は各その地方に於ける宗門の主導者であつて、總計七十九人あり、其内、後に殉教した者は十八、傳道史上に本人の記録ある者十人、親族關係を推測し得る者十九人、全く關係の分らぬ者三十二人ある。これらの奉答文は長崎に置いてあつて、二年を経て巡察員ビエイラが持つて出發し、羅馬に到着したのは一六二七年(寛永四年)で、ウルバノ八世が教皇であつた。但し奉答文はマカオ又は印度から好便に託したものと見へ、教皇が之に對する答書として日本信徒への慰問狀に署名したのは一六二六年であつた。

其後六年を経て持參者が日本へ潛入した。此時には前の署名者の多數は既に他界の人で、持參者も上陸し得ず、慰問狀は日本信徒には達しなかつた。述べて「江戸時代に於ける天草の切支丹」(長沼賢海、同誌)は文化二年肥後高濱村に於ける切支丹信者發覺の端緒、糾明の概略、檢斷吏員の態度、信者の所有せし本尊法具、現存せる信者の遺經、信者の奉持する鏡ミ貝殼及錢、切支丹の相傳ミ婚姻關係、宗門の相傳ミ婦人の地位に就て説き、守り本尊ミしては大黒天が一等多く、次は壽老神が多い事、切支丹家族の嫁は多く同信者の家から來る事、婦人殊に母が信仰受授の有力な媒介者である事などは注意すべきである。云ひ「文化二年天草切支丹宗徒糺明について」(島田增平、歴史地理)は同じく大江、今富、高濱三ヶ村の切支丹宗徒糺明について述べてあり、其他「安土ミ耶蘇教」(三品彰英、史蹟ミ古美術)「切支丹史中フランシスコ會の傳道」(姉崎正治、宗教研究)「切支丹伴天連ミ日本佛教觀」(石川秀雄、日本文化)「土佐の切支丹」(福島成行、土佐史談)「仙臺以北に於ける吉利支丹遺跡」(村岡典嗣、

改造)等がある。道教に關しては「吾が國に於ける道教」(森徳太郎、東亞之光)がある。信仰に關しては「後水尾天皇の禪宗御信仰」(辻善之助、禪宗)は東山御文庫に保存されてゐる後水尾天皇の承應前後に後光明天皇に授けられた御訓戒の宸翰に就いて、後水尾天皇が幕府に對し御憤りあらせられるもの、既に御年を召させられ御思慮も圓熟せられてゐたから急激なる舉動は御控へになり、之を後光明天皇にも御誠めになるほごにならせられた事を述べて、それは御年の所爲もあるであらうが、佛法殊に禪宗による御鍛練の結果ミ考へるにて、天皇の禪宗御歸依の事を述べ、其他「民族精神の中心に立てる天照大神」(田中治吾平、觀想)「神代の信仰」(沼波瓊音、國語ミ國文學)「創造神話の一考察」(大西貞治、同誌)「大國主命を中心ミして見たる出雲系諸神に對する信仰の變遷に就いて」(石村吉市、神社協會雜誌)「本邦に於ける高媒介信仰の考察」(中山太郎、歴史地理)「對馬の神山について」(鳥羽正雄、同誌)「罪穢の諸相」(原田敏明、宗教研究)「藥師如來の信仰ミ新藥師寺本尊」(稻葉茂、同誌)「菅公崇拜

に就て〔齋藤惇、國學院雜誌〕「菅神信仰の一面」〔河野省三、同誌〕「歿後の菅公」〔中島悅次、同誌〕「來迎の絲之他」〔橋川正、歴史と地理〕「武家の勃興と其の信仰の様式に就て」〔小林健三、史苑〕「觀音信仰と禪宗」〔松本文三郎、禪の研究〕「西國三十三所觀音巡拜攷續貂」〔岡田希雄、歴史と地理〕「横濱の開發者吉田勘兵衛の信仰」〔石野瑛、歴史地理〕「歴史に現はれたる日本刀の信仰」〔岩崎航介、神社協會雜誌〕等がある。思想方面では「我が上代國民の思想に於ける死後の生活に就いて」〔清原貞雄、歴史と地理〕は色々の神話によつて我が上代國民の思想にも甚だ漠然ながら死後の世界といふ考があつた事は疑はないと述べ、「三種神器を象徴としての道德思想の展開」〔加藤仁平、歴史と地理〕は神器を象徴としての國民思想の發展の中、特に道德思想の方面に於て中心の流れをなしたと考へられるもの即ち曲妙、分明、平天下―正直、慈悲、智恵―智、仁、勇―反智仁勇―〔超徳目―明治四年の勅語、反象徴主義、神器より天璣無窮の神勅へ〕漸次展開し行つたところの一筋のみを辿つて記し、「鎌倉時代の佛教と復古思想」〔橋川正、歴史と地理〕

は鎌倉時代の佛教の潮流中に奈良古京の佛教の復興のあることは均しく認められてゐる所であるが、その復古思想を惹き起した動因中の著しいものは、古典目錄の編纂、古典の出版、史的研究の勃興、古代技術に對する知識の獲得、古代精神に對する憧れ等であること述べ、其他「日神崇拜に伴ふ東方神聖思想について」〔田中治吾平、觀想〕「古代日本人の罪の觀念」〔木村祖教、國學院雜誌〕「推古朝に於ける新思想の日本化」〔竹岡芳雄、鶴故郷〕「日本精神と古事記の成立」〔倉野憲司、國語と國文學〕「萬葉集に現はれたる支那思想」〔林古溪、同誌〕「菅公と和魂漢才」〔山本信哉、國學院雜誌、東亞の光〕「菅家遺誠と和魂漢才」〔彌富破摩雄、國學院雜誌〕「和魂漢才に就て」〔秋山角彌、同誌〕「再び和魂漢才説に就て」〔同人、同誌〕「日本精神發展の段階」〔平泉澄、史學雜誌〕「經濟と政治と道德との關係に關する思想」〔中村孝也、丁酉倫理會倫理講演集〕「舊思想と教育上の過失」〔野田義夫、同誌〕「昭和維新と」〔本學思想〕〔小豆澤英男、同誌〕「現代思潮と國體觀念」〔田中義能、國學院雜誌〕等がある〔松野〕

史料に關するものとしては「漢韓史籍に顯はれたる日韓古代史資料」(太田亮)に次いで武田祐吉氏所藏の「延喜式卷十」がコロタイプ版で頒たれた。「春日神社文書第一」は中村直勝氏によつて編纂されたもの、上は承和より下は正徳に及ぶ古文書六一三通を收めたもの、本年度の收獲、こいひ得るであらう。異國叢書が「ゾーフ日本回想録、フイツセル參府紀行、ツンベルグ日本紀行、シーボルト江戸參府紀行、ケンプエル江戸參府紀行」を譯出したのも近世日本がいかにかに世界と接觸せるかを見得べき史料の普及の上に大なる功績を挙げたものといはれよう。「明治維新神佛分離史料」の續編上巻も既刊の正編と相俟つて維新に於ける思想鬭争を見るべきものである。編者は村上、辻、鷺尾の諸博士である。この外、「日本歌謠集成」が高野辰之氏によつて企てられ「日本繪卷物全集」がその第一、第二配本を行ひ「日本古典全集」の第三期刊行が發表され大阪毎日新聞社は宮内省所藏の宋版尙書正義以下の「祕籍珍書大觀」の續行を圖り「古典保存會」は第三期事業として春瑜本古事記上巻、康永二年本貞永式目以下の古

典複製を企て堺市が市史關係古籍の複摺を告ぐるなごそれら完成の曉には如何に史料の豊富を加へるだらう、ご思はるる計畫が相次いで發表され中には着々實行配本せられたものも少くはなかつた。なほ史籍協會は「大久保利通文書第六、第七、遣外使節日記纂輯第一」を發行した。〔肥後〕

朝鮮史 一般的研究。哲學としての儒教研究の殆ん

ぎ行はれなかつた三國時代は別として、高麗朝末期から李朝にかけての、儒教即ち「孔夫子の聖訓と朝鮮民族」(多田正知、斯文)との關係に就いて、先づ高麗朝第二十五代忠烈王のミキ安珦が朱子學を傳へて以來の朝鮮における儒學の盛衰を略叙し、次いで、麗末・李初の佛敎對儒敎の關係に説き及んだものがある。その進んで説く所に據れば、李朝に於いては、太祖李成桂の治國方針や對佛敎策なごの關係から、儒學、特に朱子學がその最初から發達してはゐたが、しかも眞に朱子の大神神を摺み得たのは明宗時代の李晦齊からである云ふ。特殊問題研究としては、「朝鮮古代史年代の新研究」(太田亮、國史)

系譜）や、三國史記・三國遺事などに依つて傳へらるゝ「新羅史について」（朴昌和、中央史壇）、その疎謬の多い事を指摘し、進んでは、数多い新羅の國號・王號等の語義に關する不審を解明しようとしたもの、外にも、尙、數種を擧げるこゝが出来た。先づ「新羅人の海上活動に就て」（内藤雋輔、大谷學報）の研究は、彼等の日本との交渉、即ち（イ）通商上の活動、（ロ）日唐交通に於ける彼等の活動（ハ）日本西海に於ける新羅海賊の横行を、彼等の唐に於ける活動を、詳細に調査論述したもので、往時の朝鮮人が如何に元氣横溢なものであつたかを遺憾なく描寫してゐる。降つて高麗朝のこゝになるを、我が前田侯爵家所藏北宋版「重廣會史の印文に就て」（稻葉岩吉、史學）の考證から、轉じて、高麗の世系に論及したものがあつた。印文に曰ふ、高麗國十四葉辛巳歲藏書大宋建中靖國元年大遼乾統元年。此の印文の様式は普通の場合と多少相違があつて、藏書の主人以外に收藏の年月を示し、却つて、その藏書の場所を省略してゐるが、諸々の理由からして、この場所は延英殿祕閣であるを推定する

事が出来る。唯、問題なのは、高麗史に十五葉と明記されてゐる禰宗が、何故こゝでは十四葉になつてゐるかである。こゝで、其の解決を試みた結果、こゝに所謂十四葉は、或る事情の許に、その前一代の獻宗を加算しなかつた代數に外ならないと斷定した。高麗忠烈王の時代には、高麗人であつて、時の元朝の帝師に就いて喇嘛僧となるものが多かつた。これを、歴史上から見て茫だ面白くこゝとして、「高麗の喇嘛僧吃折思八ハ哈思の名義に就いて」（白鳥庫吉、史學雜誌）の解釋を施したものがあつた。これに據れば、吃折思八は西藏語の *ngag-pa*（愛らしき、優れたる、貴き）の對音であり、ハ合思は蒙古語やトルコ語の *beg* で、事物に巧な人、學問に精通した人、師傳をいふのが、その本義である。次に、朝鮮側に於ける日鮮關係の貴重な史料として夙くから喧傳されてゐる「海東諸國紀の撰修と印刷」（中村榮孝、同誌）に對する研究では、先づ、その内容からして、その撰修の申叔舟によつて完成されたのが成宗二年十一月下旬から十二月上旬までの間と推定されるこゝを、換言すれば、本

書の序文に、その撰修年次を明成化七年辛卯冬とするものが誤つてはるない事を明らかにし、進んで、その撰修の動機、撰修の資料を究めた後、其れが史料として大きな價值を有つてゐるのは、申叔舟その人が、撰修者として當時に於ける最適任者であつたからであると言ひ、最後に、その印刷の事に關して考究する所があつた。さて、明朝衰へて清朝興る時運の變遷に際し、一方、劣弱の朝鮮が果して如何なる態度を以つて、これに處したか、他方、新興の清朝が、此朝鮮に對して、政治的に、軍事的に、將又經濟的に如何なる關心を有してゐたか。此の近世史上の重大問題を、かの丙子丁丑之役、清太宗崇徳元年二年に後れるこゝ二年、嚮に、此の役の結果として、清の太宗が朝鮮國王仁祖の臣服の禮を受けた受降壇の其の趾に、清朝側の命によつて朝鮮側が建てさせられた三田渡の碑の碑文の解説を通して取扱つたのは、「清和に於ける朝鮮關係と三田渡の碑文」（鴛淵一、史林）の一篇である。「李朝時代の烽燧」（松田甲、日鮮史話）に關しては、此の物が、朝鮮にまつては、支那や日本に對する

邊防上、實際に必要なものではあつたが、一方、此の制度があつた爲めに、農耕等は閑却せられ、國家をして益々貧弱ならしめたと言はれてゐる。次に、歴史地理方面で、明刀・戈・漆器等「樂浪遺品の價值と支那交通に就て」（稻葉岩吉、東亞經濟研究）の考へを述べたものは、半島と滿洲との古い交通路は、先づ平壤地方から西して清川江に沿ふて寧邊に達し、それから、涓原もしくは滿浦を経て對岸の輯安縣に入り、更に興京方面から渾河を下つたものではあるまいかとしてゐる。「高句麗の平壤城及び長安城に就いて」（關野貞、史學雜誌）は、從來、前者を今の平壤、後者を今の平壤の東北約四里許りに在る大城山南麓の安鶴宮と云ふ村に比定しようとする説が行はれてゐた。併し、此の、文獻並びに考古學的調査よりする新研究の結果は、前者を今の平壤の東北、大同江北岸の清岩里附近に、後者を却つて今の平壤に比定しなければならぬ事を教へてゐる。次に、「唐の高宗の高句麗討滅の役と卑列道・多谷道・海谷道の稱」（池内宏、東洋學報）と題する一篇がある。この論文の一半の目的は、

勿論、通鑑に所謂、劉仁願坐征高麗逗留流姚州の理由を解説しようとする點に存してはるが、他の主要な目的からして、之をこの項中に編入しても別段の差支へはあるまい。上記の三道は、該役の當時南鮮を固めてゐた劉仁願軍・新羅勢なき助征の軍に對して指示せられた進路として、唐書・三國史記なきに見えてゐる。據つて惟ふに、此等の三道は、南鮮と北鮮とを聯絡する當時の主要なる交通路であつたらしい。此の見解に基いて、京城平壤間の道路の記載を他の史料に求めるに、(一)卑列城を經由するもの、(二)大谷道、(三)水谷道を見出し得た。問題の三道は夫々此等の三道に相當し、多谷は大谷の轉音、海谷は、水谷が意味の似寄りから斯く誤られたものであらうと云ふのが其の要旨である。經濟史方面に於ては「時代を異にせる結算制度間の脈絡」(鏡保之助、盛岡高農創立二十五周年記念論叢別刷)の存在に對する主張を聞く。田制及稅制等土地に關する制度に於て、耕地面積の表示として、將亦稅租、賦課の標準として廣く用ひられてゐた結算の、三國時代以降李朝時代に至る各

時代の悉ゆる體様を詳察して、以つて、上記の結論に達した著者の努力を多きせねばならぬ。次に社會史方面。朝鮮に現に行はれてゐる所謂舊式婚禮で最も重要な部分を成すものは、大禮と于禮との二つである。而して、この大禮の序曲として女家に於て執り行はれるものを奠鴈の禮といふ。「奠鴈考」(秋葉隆、民族)は、元來儒禮である此の禮が、今では却つてその本地に於いて、殆んご其跡を絶つてゐる理由を(一)支那では、早く婚姻が男系的になつた結果、親迎に當つて女家に行はるべき此の禮の重要さを失つた爲め(二)支那民族の經濟思想の發達と共に、所謂財婚の弊が夙に現はれ、納幣の重要性を増した爲めにはあるまいかと考してゐる。又、奠せられる鴈そのもの、意味するものは新郎の魂の運載者であるとし、鴈が特に此の用の爲めに選ばれた事に對しては、恐らく、鴈が陽鳥であるといふ上代支那人の信仰に基いたものであらうとの解釋を下してゐる。その他、美術史に關しては、「朝鮮の佛教彫刻」(源豐宗、思想)、言語史に關しては、「朝鮮語の沿革について」(ジ・ジ・ラムステ

ツド、民族)、旅行紀ミしては、「扶餘の舊都」(清野謙次、同誌)、「慶州紀行」(石崎達二、現代佛教)なきがあらつた。

### 東洋史 東洋史學及支那學 それと、一つは狩野

博士の、他は高瀬博士の還曆を記念する爲めに編纂された大冊二部の支那學論叢の刊行は、例年に劣らぬ程夥しい諸種の貴重な研究論文の發表ミ相俟つて、昭和三年度に於ける斯界の隆盛を如實に物語つて居る。恰も、この時に當り、「本邦に於ける東洋史學の成立に就いて」(杉本直治郎、歴史ミ地理)系統的な研究を試みようとする企てを見るは極めて意義深くも、又嬉ばしい事である。抑々今日謂ふところの東洋史の母體ミ看做すべきものは明治初年頃まで尙盛んに行はれてゐた謂はば「十八史略」的な支那史である。此の支那史の學風ミ幕末以來輸入されるやうになつた西洋風史學との接觸は、新日本の史學界に於いて相背馳する二つの傾向を生んだ。一つは舊來の支那史に新來のものを類化しようとし、他は新來の西洋風史學に、舊來のものを應化しようとするものである。

客觀的な史實を重視する西洋風の支那通史は、實に後者の勝利の裡に生れて來た。次いで邦人の注意が、安南朝鮮の如き支那文化圏に屬する環周地方の歴史へ向けられるに共に、從來の支那史は必然的に、支那を中心とする東洋史の立場への轉移を辿らねばならなかつた。かゝる名實共に西洋史に對する東洋史の科目を創設した(明治二十七年)人ミしては、勿論支那通史の著者那珂博士を擧げなければならぬ。しかも、一般に東洋史の意義もホゞ領解せられるやうになつたのは、明治三十一年に桑原博士の中等東洋史が出されてからであるといふ。我が東洋史學成立の由來は大略この様なものと思はれるが、その成立迄の間には、又色々の注意すべき文化現象もそれに伴つて生起した。其の一つの實例ミして、「明治文明に鎔化した支那書其他」(石井研堂、明治文化研究)に就いて考へて見るなきも興ぶかい事であらう。現在の本邦に於ける斯界の隆盛は已に冒頭に述べて置いた通りであるが、「歐米に於ける支那學の現況」(ドイツ編)(石田幹之助、支那)も、亦依然ミして活潑である云ふ。さり

ながら、論者或ひは「支那古代經濟思想史の研究」(田崎仁義、同誌)に對する方法論的考察を試みて、その研究が難事中の難事であることを指摘し、さて、今日この此難事業の重責に當る可きものは我が國人を措いて他に之を見出し得ざるが如しもさいふ。このことは、恐らく他の領域にあつても同然のこゝであらう。従つて我が國に於ける東洋史學者の任務も、亦、重しと謂はねばならぬのである。

支那史即中國史 支那の原史時代文明に對する研究熱は、近來、益々熾烈の度を加へて來た。此の題目の中で先づ問題になるのは、「中國之銅器時代」(馬衡、民族)が果して何時から始つたかである。従來、冶金術は虞夏に始つたとする説が傳はつてゐた。併し、この説の根據になつてゐる二つの事實、即ち、堯典禹貢に金屬に關する記事の見える事、及び左傳に禹が九鼎を鑄たさある事、は、前者がその書籍の年代に於て、後者がその傳説の由來に於いて、何れも信を實くに足らぬものである以上、この説そのものも亦成り立ち得ない。然るに、現存の或

種の銅器の文字には、周代の文字とは異つて、彼の殷虛から出た甲骨の文と同じものが見受けられる。且つ、この銅器の發掘場所は、宋代の記録に據れば同じく殷虛に當つてゐる。よつて惟ふに、商の末季には已に完全に銅器時代に入り、入期以來凡そ四五百年を經過してゐたものであらうと云ふ。尤も「五車一得」(中島竦、史學)中の一項「金三品」には、禹貢にいふ揚州の金三品は金・銅・錫の三者、荊州のそれは銀・黃金及び鐵の三者であらうと其の品種の考證までが試みられてゐる。馬氏は上述の様に、商及周の二代を支那の銅器時代と解したが、この時代の銅器の面に多く現はれ、恐らくは古代の支那人に深く愛好されてゐたらしい「饕餮紋の原義に就て」(石田幹之助、考古學雜誌)は、邪視を防ぐ厭勝の意であるとの解釋が施された。翻つて、この文明の所有者商人、即ち「殷人の分布と其の徑路に就いて」(小川琢治、史林)は、彼等が、歐亞大陸の内部、即ち中亞から東遷して支那本部に來住するや、遂に渭水下流から洛水々源に互り河南一圓に散布したものと考へられてゐる。

さて、如上の原史時代文明の研究に對しては、遺物遺蹟の研究を爲すことが古記録の研究と相俟ちて絶對に必要なである事は申す迄もない。此の學問上の理想を高唱しつゝも、尙、不完全なる前者の現狀に即して、主として、小學方面と、文獻學方面とより其所説を進めていつたものは「支那古代聚落(丘陵南麓發生論)」（那波利貞、歴史地理）である。一體、古帝王の都を意味する虛、或ひは墟の根本義は丘に在る。而して、丘の字は地上に兩人相跪く象形で、人民群居の地點を意味する。然るに支那古代の聚落は、その部族民の外敵に對する自衛、水害に對する自警、獵場・牧地に對する必要等の事情から、概ね、小阜を背に負つて發生した。其の結果は、丘の字に地形の實際より緣由して阜と謂ふ第二義を生じ、後に至つては、此の第二義が専ら勢力を占めるやうにさへなつて來た。又丘字古くは堦にも作られてゐる。これは、恐らく、當時聚落より指しての北方の土阜の意であらうと見て、その論旨を盡し、更に支那古代の地名に丘陵に關するもの、多いこと、又、齊の營丘、燕の薊丘の

丘陵の位置が、文獻上、聚落の北方か西北方に接續して存したと信ぜられる事を以つて、其の傍證に資したものである。猶、こゝに謂ふ原史時代、即ち夏と謂ひ殷と謂ふも、要するに、原始地方に於ける原始時代の物語りであつて、文化を其の對象とする歴史の世界の事ではないとする「支那原始時代考」（丹羽正義、同誌）があつた。次に、年代學的研究と、それに關係の深い古代天文學研究との領域では、先づ「周初の年代」（新城新藏、支那學）に關する研究を擧げなければならぬ。これは、彼の劉歆が周初武王克殷の歲を推算するに當つて採用した方法を推重し、且つ之を襲踏し、唯、その際に彼が陥つた根本史料の解釋に就ての重大なる誤解を訂正する事に依つて、その歲次を、劉歆の所得の結果に比して五十六年程新しい西紀前一〇六六年（乙亥）に求め、又、周初より共和元年（前八四一）に至るまでの周魯王公の歴代に就ても考察を加へ、更には緯書・逸周書・竹書紀年等に對しても年代學的の批判を行つたものである。尙、著者に據れば、殷及び夏の年代に就いては、殷の世、

約六百年、夏の世、約五百年といふ程度以上には知るこゝが出来ない云ふ。次に、「書經堯典の四中星に就いて」（橋本増吉、東洋學報）の研究は、堯典の作者が、製作の當時、果して自ら四季の四星を觀測したものであるか否かの問題に關し、（A）四中星は同時代に同時に實測によつて定められたのではなく、机上の作製に係り（B）四中星の物語は陰陽の思想によつて作爲されたものであるこゝを主張してゐる。而して、此の研究の重點が主として、漏刻が上古よりあり且つそれは上古に天文の觀測が行はれた時から傳來したものであらうといふ飯島忠夫氏の推測の甚だ無法なる空想であり、同氏の、天體觀測の時間は日の長短に關せず、年中一定して居り所謂初昏即ち今の午後七時に行はれたものであるとす議論が、全然何等根據なき空論なるこゝを明白にする點に置かれてゐる關係上、支那に於ける漏刻使用の起源や時刻區分法の沿革なきに就いても、詳しい考證が行はれてゐる。

次にいはゆる歴史時代を一括して、先づその中の政治

史方面の業績を見よう。「孔子と政教」（赤池濃、斯文）の一文は、治世に尊孔あり、亂世に排孔あり、支那の政治史は、宛然これ尊孔と排孔との争闘であること斷じ、又孔子が自然の則に従つて人事を治めようとした主意を讚め、最後に、政治家としての孔子と、孔子とは對蹠的位置に立つて覇道を代表する管仲との比較を試みたものである。蓋し、この一文の意味するところは、別に尊孔、特に政治的意味を有つた「孔夫子に對する崇敬」（服部宇之吉、同誌）、即ち歷朝の孔夫子に對する贈諡賜爵並びに釋祭釋奠の歴史を讀むに及んで、層一層、印象的なものになるであらう。さて支那に於ては、治者と被治者との利害は極端に相反馳してゐる。従つて、支那の一般庶民は、古來、王朝の交迭・英雄の浮沈に對しては直接の交渉を有せず、唯、英雄の野心の犠牲となる事を、極力、避けて來た。そして、此の目的の爲めには種々の手段が案出された。「甞食菹漿迎王師攷」（那波利貞、歴史と地理）は、實に、この孟子の一句を以つて如上の手段の一つの現はれを見るものである。民に民としての策があ

れば、君にも君としての策がある。尙公主の如きは、古來自家の權力を強固ならしめようとする君策の一例である。而して、この「尙字の解」(池田四郎次郎、東洋文化)として従來の「配」でもなく「奉」でもなく、即ち「妻」であるとの説が出てゐる。「御大禮由來ミ外國禮」(佐藤仁之助、同誌)を説いたものには、支那の天子支那帝王の即位式といふ目出度い節名も設けられてはゐるが、元來、支那は革命の國であつて、「易姓革命ミ國民革命」(淺野利三郎、歴史教育)ミが上古以來最近時迄の支那史を特色附けてゐる。「支那の國民主義革命の成敗に關する歴史的批判」(矢野仁一、經濟論叢)に於いては、支那には、國民主義的國家に最も大切な國民的精神が缺けてゐる。こゝが摘剔せられた。なほ、此の論文は彼の三民主義を祖上に解剖した上、少くも、支那の現狀に於いて此の主義を實行すれば、支那の國民が實質的に他の國民ミ平等になることは無意味に延期されることゝなり、支那の國民主義の革命の完成には百害あつて寸益なしとしてゐる。これ、「支那三民主義の原理並實行」(前

田幸太郎、東亞經濟研究)が政治革命の階段に於いては勞農ロシヤの共產主義に全然一致して異る所なしとする説ミ、併せ考ふべきものである。其の他、一般政治に關しては、「財政上より觀たる支那の政治」(木村増太郎、東洋)、「支那國民運動三十年史」(長野朗、同誌)なきがあるが、別に官制に關したのものには、「左右尊卑考」、那波利貞、歴史ミ地理)や、「支那帝制時代の官制に就いて」(加藤鎌三郎、支那)なきがある。前者は、歴代の官制に於て左右相對立する官の存する場合、或る時代には左を、或る時代(元)には右を其の上位に据ゑてゐる事實に疑問を發して、漢族に於いては、尊左尊右、いづれが、其本來の習俗であつたかを究めようとしたものである。説く所に據れば、元來、左ミ右ミの兩字は何れも人の手に淵源した文字であるから、左右の甄別も、畢竟、此の人の手に由來したものと思はれる。然るに禮記内則篇の記事なきから察するミ、支那古代には右手が主、左手が従ミ看做されてゐた。従つて、漢族本來の習俗は尊右であつたさせねばならぬ。漢の武帝頃から尊左の風に

變じたのは、却つて、秦人並びに楚人の風俗に影響されたものである。後者は、前清の官衙の制度名稱等に對する解説であつて、皇室に關する官廳、中央官廳、地方官廳の三項に分けてある。新しい所では「支那國家革命の道途上に於ける委員制と獨裁制に就て」(松井石根、支那)の研究が、注意すべきものであらう。次に法制史方面。「禮・法・律・刑・罰の意義及び關係」(東川徳治、東洋文化)を考ふるに、唐虞三代に於ては、禮を以て治國の要件と爲し、刑は之を幫助するの具と爲してゐた。而して、戰國時代には魏の李悝が法經六篇を著し、秦代に法を律と改めてからは、刑法典は一つに律と稱するに至り、爾來、禮と律(刑法)と法(行政法)との區別を生じ、漸次、禮の効力及び範圍は縮少せられるに至つた。罰は五刑の酌量刑として科し、又は五刑に這入らない小罪に科する制裁であつて、刑法に附するものを贖刑又は罰金とし、官吏の公務上の罪に科するものを罰俸といふ。但し、罰俸の科を設けたのは後世の事であるといふ。さて、支那の法律に於いて、殆んゞ凡ゆる犯罪が親

族關係の介入によつて其の刑罰の輕重を加減せられてゐることは、既に周知の事實である。而して、その親族關係を規定するものは、喪服制即ち親等制である。「日支親等制の比較」(牧野巽、民族)は、(A)支那制では、儀禮・禮記の時代から、喪服制が其のまゝ親等制として使用されてゐるのに、我國では、これが、儀制令の五等親制と喪葬令の服制制とに分離されてゐるといふ外形的相違の外、(B)六箇條に互つて、其の内容上の差違を指摘し、特に、適子衆子別の撤廢・子孫の尊重、並びに妾を妻と同位置に置いたことを以つて、日本五等親制の大特徴であるを云つてゐる。尙、これら以外には、清律中の現に効力を有する部分や、民律草案や、中國民事習慣大全などを主要な材料として、近代殊に現行の「支那に於ける家産分配に關する法規と慣習とに就て」(西山榮久、東亞經濟研究)詳しく研究したものがあつた。社會史方面には平民の發展と政治の重要性減衰とに依つて特色附けられてゐる「近代支那の文化生活」(内藤湖南、支那)の内的素材を抽象して、大衆性、古代生活への還元の傾

向、天然保存の意志、古代物の愛護、交通の便利といった五箇の要素に歸した。「日支社會格の對比」(今井時郎、同誌)を試みて、それ等が共に自然的血縁的集團社會たるの本質を有する點に於ては、大體、質を同じうするものであるとするもの。國民黨の突飛な女權擴張計畫から結果しようとしてゐる「支那家族制度の破壊」(西山榮久、同誌)を豫想して、從來の支那婦人の位置には同情するが、同黨の主張には讚成し難い云ふもの。

交通機關の發達、家族制度の崩壞、信用經濟の發展等の理由に依り、今や「崩壞過程にある支那のギルド」(岡野一朗、同誌)や、各地現行の「支那の徒弟制度」(同人、同誌)を各方面から考察したもの。さては古いところで「支那古代の共産制度」(黎世衡、支那問題)の研究。新しいところでは「北支那の紅槍會と百姓一揆」(田中馨堂、東洋)の其れなきが見當つた。次に經濟史の領域では、「支那古代の土地制度に就て」(下田禮佐、歴史と地理)の論説がある。曰く、支那の古記録に見える井田法はロシアのミール、英國のヴィレツヂ・コムミュニテイ、ドイツ

のマルク等の諸制度に該當するもので、商以前の原始社會の中に於て、自然に發達し、爾來、封建政治の發展其の盛衰を共にした。即ち周代に至つて略ぼ完全の域に達したものが、戰國に及んで遂に廢頽したのである。次いで秦漢以來七百年の間、支那の社會は、その性質上、必然的に富豪の兼併・貧富の懸隔といふ弊害を醸成すべき土地私有制度を経験するに至つた。而して、この弊害除去の目的から、後魏の爲政家によつて、新規に計畫施行された制度は即ち均田法である。さて、孫氏三民主義の中の一つである民生主義の最も重要な内容となつてゐる「地權平均」支那古來の土地制度」(吉田虎雄、東亞經濟研究)を比較するに、地權平均最後の目的が、果して、孫文の言つたやうに「耕田有其田」に在るものかすれば、これは、古來、井田制、乃至は、限田制均田制の目的とした所と全く合致するものであつて、従つて、また、氏の所謂地權平均の酷法であることは、限田制なきと伯仲の間に在ると言ひ得るのである。「明代の漕運」(清水奉次、史學雜誌)は、時代別に見て、三つに分類するこ

こが出来る。(一)洪武の初めには、永平は勿論のこも、北平から遼東にかけての兵糧を専ら海運で送つてゐた。明の遼東經營の始つた洪武四年の翌五年から、八年迄は、吳禎その他が此の遼東への海運を掌つてゐたらしいが、八年から二十年迄は、朱壽と張赫の二人だけが之を掌つた。(二)次の海運陸運並用のこもこも、明初以來すで行はれてゐたこは言ふ迄もないが、その狀勢の頓に加はつて來たのは、永樂時代に、國都が、北平の地に移されてからである、而して、いはゆる陸運の場合、名辭通りに陸運の行はれたのは、黃河と衛河との間であつて、その實際の距離は、大體百七・八十里であつた。(三)河運も既に永樂初年から、他の二運に對する第三運として行はれてゐるが、他の二運を罷めて、河運のみに依るやうになつたのは永樂十三年からである。而して、この河運は、初めは支運の法であつたが、次には兌運の法、最後には改兌の法といふ風に變化して行つた。次に「投獻考」(同人、東亞經濟研究)に據れば、投獻は即ち田地の託獻の意であるが、明代には、稅役の免除といふ特權を

有つた功臣の田地に對して多く之が行はれた。而して、投獻者の側にも、投獻を受ける權方者の側にも、各々不正の二通りの種別が認められる。明の朝廷は屢々これが禁令を出したが、更に遵奉された氣色はなく、土地に關する制度は次第に崩れてゆくばかりであつた云ふ。又、「清代流通の外國銀貨に就て」(西山榮久、支那)は、別に支那の通貨中で、近年、大いにその數量を減じ、近い將來には全然遂に跡を絶つかも思はれる「清代流通の銅錢に就て」(同人、同誌)もこもに、その種類その計算法に關する簡明な個條書的な説明がある。「北支那農民生活の經濟的考察」(竹内元平、東亞經濟研究)や、時事問題としての「南京政府の關稅自主と裁釐加稅」(吉田虎雄、同誌)問題に對する解説兼批判のやうなものも、斯學に志すものゝ一讀を要するものであらう。通商史關係のものでは、「中世蕃貨考」(日柳彦九郎、同誌)がある。これは、主として、趙如适の諸蕃志に基き、之を補ふに圖書集成其の他の類書を以てし、之に添ふるに泰西に於ける専門學者の考證と解説とを以てして、宋代に、亞刺比亞・

波斯及印度を初め南海の諸島から、南方支那の諸港に舶載せられた外國貨物の主要なものに就いて、懇切な解説を施したものである。唯今の所、第一部、草木編の中、第一類、香木・香脂及香油類として、腦子・乳香・沒藥・金顏香・篤耨香・蘇合香油・安息香・梔子花・薔薇水・沈香（箋香）・速暫香黃熟香生香・檀香・丁香・降真香・麝香木・木香の十五種目が完結されてゐる。なほ、この部門と交通史に係したものは、諸外國の條にも數例を見出し得るであらう。外交史方面では、三國干涉以後の東洋政局の轉遷を主題とした「日露支外交の三十年」（滿川龜太郎、東洋）、或ひは「極東外交史稿」（中野英光、支那）なき以外にも時事に關係したものは頗る多く、一々列擧の煩はしさを避けるが、北伐で意外の成功を収めて浮れ氣味となつた國民政府の「日支通商條約廢棄について」（末廣重雄、經濟論叢）の論説なきは、就中、注意すべきものであらう。次に、歷史地理的研究を見るに、「秦の象郡の位置に就いて」（佐伯義明、史學雜誌）は、從來の之を漢以後の日南郡とする説に對し、新たに、之を今の廣西省の賓陽縣を中

心とする地域に比定しようとする説が提出された。「元代の開元路に就いて」（和田清、東洋學報）も、その疆域に關し、又その治所變遷の沿革に關して新しい考證が行はれた。疆域に關しては、從來、箭内・池内兩博士の御説があつて、共に之を廣く全滿洲を徹ふものとして居られたが、これは、誤つて、開原宣撫司の疆域を直ちに開元路のそれに移された結果であつて、實は、大體、今の鐵嶺・開原・昌圖の一帯だけが、其の疆域である。路治の變遷に關しては、箭内博士は、創始以來、農安にあり、世祖の至元二十三年頃今の開原に移つたこと、池内博士は、最初、三姓に置かれ、順帝の至正二年に至つて始めて今の開原に移つたことされてゐるが、舊開元は、種々の事情からして、之を今の穆陵附近に比すべきものである。且つ、此の舊開元は、大徳以前より既に遺趾ばかりの廢城であるから、至正年間まで此處に開元路治のあり得た筈はない。尚、本篇には合蘭府水達達等路の地理的考證も附け行はれてゐる。昭和三年六月に決行された國民黨政府の南京遷都の遺した一つの題目、北京及び直

隸省に「北平及び河北省の新舊各稱に關する史的考察」（井上以智爲、歴史と地理）は、或はその史的背景から、或はその名稱の傳統から、或はその地域の沿革から見て、今次の改稱が極めて妥當なものであることを證明した。翻つて、宗教史方面の研究はさうであつたか。先づ佛教關係のものを見るに、「佛教の東漸年代の研究」（林屋友次郎、現代佛教）は、佛教が漢武元狩二年に西域から支那に渡來したといふことは、文獻の上から謂つても、又四圍の環境から謂つても、絶対に否定し得ない事實であるを斷言し。佛教傳來以後、羅什の譯經の始まる迄の「黎明期に於ける支那佛教哲學」（佐藤純英、龍谷大學論叢）の夫れは、格義・心無義・本無義・即色義・識含義・緣會義及び幻化義の内容批判を通して、新入の佛教思想と支那在來の思想との接觸を啓示した。そのほか「三階教に於ける全佛教の改造運動とその經濟思想」（矢吹慶輝、佛教思想）、「五臺山の佛教」（井上以智爲、歴史と地理）など貴重な諸研究の中でも、「仁壽舍利塔考」（佐々木功成、龍谷大學論叢）は周武の法難を受けた支那佛教を全國的

に復興せしめた動機となり、且つは、隋唐に於ける其の全盛時代を現出せしめた有力な原因とも考へられる隋の文帝の仁壽元年・二年・四年の前後三回に互る舍利塔建立事業に對する考察であつて、全國百有餘ヶ所に及ぶ塔の分布を考へては、江北の地に繁くして江南の地に薄いことを指摘し、之を、周武の廢佛の及ばなかつた南地には餘り數多く建立する必要を認めなかつたせいに歸してゐる。いづれば佛教華やかなりし頃の所産である我が「聖武天皇宸翰雜集に見えたる隋大業主淨土詩に就いて」（圀下大慧、東洋學報）は、その詩藻の極めて雅麗な點に於いて、諸經の内容を巧みに織込んだ詩才に於いて、之を、氣格雄大な詩風をもち、且つ左程の淨土教學者でもなかつた大業主即ち煬帝の所作とする通説には讚成し難いと見て、別に、この詩が、彼の一代の文宗たる隋僧釋彥琮の創作になる唱導法の一部に載せてあつた禮讚、即ち願往生禮讚偈そのものであるとの新しい斷定が下された。「日本僧即元の選文せる嵩山少林寺の碑」（常盤大定、同誌）の研究の結果としては、選文者即元に關する

新事實と共に、被選文者であり、傍系乍らも曹洞宗の第十八世に當る息庵禪師が、嵩山祖庭大小林禪寺の第十五代目の住持であつたさいふ新事實が發見されてゐる。佛敎以外では祇教に關係したものが三篇ある。宋の王隱の唐語林卷六に見える、唐の顏真卿の子の顏頌の小学が祇教の僧侶を意味する穆護であつたさいふ、新しい「祇教に關する一史料」(桑原隲藏、史學雜誌)を學界に紹介した一篇は、顏真卿のやうな人が斯様な外國名詞を使用した所に、その文化が世界的であつた唐時代の特色を認めてゐる。「祇教雜考」(神田喜一郎、同誌)の一篇も亦、從來、此の方面の研究者によつて見逃されてゐた三つの史料を紹介してゐるが、(一)宋の御伯温の邵氏聞見前錄卷七に見える記事からは、これまで二つのものゝ考へられてゐた宋の東京城々北の祇廟ミ、馬行街北舊封丘門外の祇廟ミは、全く同一のものを指してゐたさいふ事實の考證に入り(二)宋の董道の廣川畫跋卷四、所見の記事からは、祇神に祈願して靈驗のあつた場合に、其の神像を畫いて獻納するさいふ一種の風習が夙くから存在したのではあ

るまいかミ推考し(三)明の彭大翼の纂著に係る山堂肆考所見の蜀公主幸祇廟の說話からは、唐の樂府牧護歌が、唐代に蜀の地方に於て盛んに行はれたらしい形迹を見出してゐる。他の一篇は、「神田學士の「祇教雜考」を讀みて」(石田幹之助、同誌)、學士の所説の細部に對して迄も、或ひは讚成、或ひは反對の意見を述べたものであるが、補説新釋到らざるなき間にも、突厥が祇神に事へてゐた事實の指摘なきは、ひゞしほ、注意すべきものであらう。回教に關しては、著者自らの寓目によつて記された「北京城内に見る回教徒の消長」(後藤朝太郎、東洋)の消息があつた。次に信仰史方面では、「古代支那に於ける龍蛇崇拜の氏族的關係」(井上芳郎、民族)を述べたものがある。戰國時代の齊及び其の氏族である姜姓の氏族的信仰は、星占學的に龍蛇ミ結合した。而して、その龍蛇崇拜を思想の上から觀察するミ、其所には二つの傾向が認められる。一つは龍蛇に關する聖視以外に、其の水神ミとしての性狀に對する信仰ミ、之に附隨する治水神ミとしての信仰ミを同時に有するものであり、他は主ミとして、治

水者としての地位のみを其の崇拜の對象とするものである。禹及女禍に關する兩治水傳説も、この龍蛇崇拜の民族的關係から解釋することが出来るといふ。此の「龍の由來について」(出石誠彦、東洋學報)は、龍が水性であり、又昇天性をもつて考へられてゐた事實から、今日、龍卷を稱せられてゐる自然現象が其の原形ではあるまいかといふ説が提出された。學術史に關するもの、中、「論語源流考」(市村瓚次郎、史苑)は、論語の語義を解して、漢書藝文志に論纂故曰「之論語」といふのが恐らくは最も妥當な説であらうとして、その論纂の來歴を究めたものである。これに對し、漢魏叢書に集められた「中論の比喻を考察す」(アルベルト・カステラニ、斯文)のこゝによつて、その著者徐幹を單なる儒學者以上のものに推賞したるものもある。降つて「宋の文帝の四學」(岡崎文夫、歴史と地理)並置の處置に對しては、司馬光の如き反對者も居るが、此の學界に於ける儒學・史學・文學・立學の並存の關係は、當時の政治社會に於ける王室と貴族との並存と相通するものであつて、その時代としては、必しも

矛盾を含んだ處置ではなかつたといふ。「永樂大典に關する二三史料」(神田喜一郎、同誌)とは、嘉靖の重臣徐階の世經堂集の中の大典の重録事業に關係してゐる回奏・奏疏、計五通を指すものであつて、これらの史料を精察すれば、嘉靖四十一年度に於ける彼の重録事業が、果して如何なる準備のものに着手され、如何なる規畫の上に遂行されたか、おのづから判然してくるであらう。其他、「支那古代の教科書」(芝野六助、教育論叢)「通俗支那辭書談」(池田四郎次郎、東洋文化)なき、何れも學術史關係のものである。次に思想史方面のもので、先づ内包的思想に對する研究としては、「儒教に於ける天の思想」(本田成之、宗教と藝術)即ち「孔子の敬天思想」(青木晦藏、東洋文化)をもつて、儒教が宗教的であることの一つの現れとするもの、外、「天に就いて」(大西甕觀、密宗學報)、「中國の敬天思想と古聖賢の内省」(林盛達、觀想)、「儒教の太和保合思想」(相良政雄、同誌)、さては、「莊子の哲學」(學牛樓主人、觀想)、「莊子考」(前田利鎌、現代佛敎)、「儒道二敎の比較研究」(宇野哲人、支那)

なご幾多の論説を見受けるが、他面、時代思想乃至は國民思想に對する研究に於いてもまた名篇雄説に乏しくない。抑々ある民族の正統の思想とは、先づ第一に人類の本性に合致するものであり、第二には、民族の環境に順應し適應するものでなければならぬ。而して此の二條件を満足させる様な「支那に於ける正統思想」(市村瓚次郎、斯文)は正しく儒教であつて、墨子・法家及びその外の諸子百家は何れも傍系である。漢武が儒教を國教としてから後二千年、此の正統思想は、古くは佛教道教、降つては喇嘛教・耶蘇教等傍系の思想との間に甚だ鬭争的な交渉を繰返へしながらも、なほ現代に及んでその位置を保持してゐるのである。「年號に現はれたる時代思想」(同人史學雜誌)は、やがて如上の鬭争的交渉の結末表示であるとも謂ひ得る。殊に道教關係の年號のある場合には、たゞ文獻上の證明は不充分であるにしても、唯これ許りによつて、その當時道教尊崇の思想が存在してゐたことを推断する事も出来るのである。因みに、年號に對する考察からすれば、思想的に唐の時代は漢魏六朝の方へ連り、

宋の時代は元明清へミ連絡してゐるこいふ。最後に現代の支那に遊んで「長江江邊の思想の流れ」(後藤朝太郎、斯文)を考へ、古來長江流域に漲つてゐる思想の特色を、北方の實際的實踐的従つて道德的に進まんミするに對し、空想的理想的、従つて哲學的な點にあるミして、南方支那の思想狀態を各方面から觀察した論説も仲々面白いものであつた。文學史方面に轉ずるミ、「京本通俗小説ミ清平山堂」(長澤規矩也、東洋學報)ミ短篇四種ミの三種の書は説話が小説へミ變化してゆく階梯であつて、其の形式の上から謂つても、將又内容の方から觀ても、小説史の研究にミつては貴重な材料であるミを證し。「三言」ミ二拍」について」(同人、斯文)は、前者の材料ミなつたものは京本通俗小説なミの様な話本の類であつて、編纂者馮夢龍が多少ミも道德的な見識を持してこれに取捨を行つたミ、後者は凌濛初が三言に倣つて編むたものであるミを叙し。別に、元曲がいゆる明の南曲に移つて行く其の階梯の實例を提供する一文獻ミしての「明宣德刊本嬌紅記」についての所感」(同人、同誌)を

述べたものなきがある。「支那劇の過去及現在」（井上紅梅、東洋）の一文は歐陽予倩氏の談二黃戲を譯註したものの。「民國の新文學」（澤田總清、國學院雜誌）は、胡適氏の文學改良芻議に刺戟されて興つた白話文學に對する解説である。言語學史に關係したものとしましては、「古代支那の吳語吳音に就て」（中村久四郎、大崎學報）「支那語の言語學的研究」（高畑彦次郎、藝文）と共に、前掲の通俗支那辭書談を擧げなければならぬ。次に、美術史・工藝史・工作史方面の述作を列擧すれば、東洋畫に對する一考察（金原省吾、祖國）、「東洋畫の風景畫的傾向」（同人、國文教育）「東洋畫の意向」（同人、學苑）、「王維とその延長」（同人、同誌）、「唐朝の繪畫」（内藤湖南、佛教美術）、「宋畫の傳神術と禪宗の肖像畫」（澤村專太郎、禪の研究）、「ヴェヅル所藏元畫蓮花圖に就いて」（恰伊之助、佛教美術）。「漢の獅子石像に就て」（米内山庸夫、支那）、「北魏塔婆樣式の系統について」（足立康、國華）、「龍門奉先寺の造像について」（松本文三郎、佛教美術）、「直隸省易縣舊在の陶甌漢に就いて」（原田淑人、考古學雜誌）。「漢代の騎射狩獵

圖紋に就て」（同人、史林）、「漢代の金畫飾銅盤に就いて」（同人、史學雜誌）、「王莽始建國二年鏡に見えたる圖様に就いて」（駒井和愛、考古學雜誌）、「歐洲に齎された二三の唐鏡に就いて」（梅原末治、佛教美術）。「支那古代の車制」（矢島恭介、考古學雜誌）なき頗る數が多い。人物論・傳記及年譜の類。先づ、謙虛の心の持主であつた孔子の心が如何にして發展して行つたか。「孔子と謙虛の心」（高田眞治、斯文）と題する一文は、孔子が、己を虛とする即ち自己を否定する態度からして、修養の結果、自ら任ずる即ち自己を肯定する態度に進んで行つた經路を、經書の解釋によつて探求したものである。前掲の莊子考は、一切の矛盾を封つこなき謂ゆる了事の凡夫こそは莊子の目指す至人であつたといふ。六朝隋唐時代の名僧「護法戒賢立辨の年代」（宇井伯壽、現代佛教）は、護法、五三〇—五六一、戒賢、五二九—六四五、立辨、六〇〇—六六四であるを考證された。尙、勝軍・難陀・賢愛・安慧・德慧・陳那・清辯らの諸僧に就いても、各々その年代が考證されてゐる。近世では、明の文人「李夢陽年譜略」（鈴

木虎雄、藝文)の外、「會國藩ミ儒教」(守岡正篤、斯文)との關係を論じ、その在京日記所載の課程、金陵節署中日記所載の日課なき、彼の慘憺たる反省内訟を示す尊い記録を通して、その至醇の情緒・至誠の人格を讃へ、儒教は清末にこの人を出して能く斯文の尊を示したものであるミ結んだものがあつた。因みに、市村氏が、會國藩は單に清朝に忠を盡すさいふばかりでなく、外來思想を代表する太平天國が正統の思想たる儒教の文化を破壊しようとしたのに反抗して起つた—さいいつて居られるこゝを附加へて置く。最後に旅行記としては「孔子ミ現代支那」(鹽谷温、同誌)、「山東省臨淄に於ける漢、六朝の遺物」(米内山庸夫、中央美術)「齊の古都を訪ねて」(同氏支那)なきがあつた。

周遊史 先づ南方からいへば、琉球に關して、「琉球の地割制度」(仲吉朝助、史學雜誌)の研究、支那戰國時代の燕のものミ認められる「沖繩縣那霸市外城貝塚出土の明刀に就いて」(橋本増吉、史學)の紹介や、問題の多い「Cores は琉球人である」(秋山謙藏、同誌)として、琉球

がマラッカ地方ミ盛んに交通を行つてゐた事實、及び琉球が高麗ミも或る事情が原因になつて通交してゐた事實ミから、琉球のマラッカ交易船の乗組員の中に Corel Corel Corel Corel ミ呼ばれた人のあつたこゝを想像して、この「Cores なる名稱の發生ミその歴史的發展」(同人、同誌)ミを解釋しようとしたものがあつた。安南地方に上陸して、「晉代南部アジア瞥見」(佐伯義明、史林)を行へば、そこには、單(英領緬甸の南北 States)、魯扶(琅勃刺邦)、厘都乾(コンツ—地方)徐狼(ジャライ地方)式僕(雲南の西南の一地方)大岐界(?)小岐界(?)等の村落の集團が見受けられる。次に「緬甸の支那に對する朝貢關係に就いて」(矢野仁一)の考察を聽かう。漢唐宋等の時代のこゝは姑く置き、元の世祖の時に支那が屢々緬甸征討の兵を出してから緬甸は、普通一般の朝貢國ミは違つて、稍々實際的關係を支那に對して持つやうになつた。明代には、此處に宣慰司が置かれた。而して、錢糧を納めなかつた此の緬甸宣慰司が却つて土司ミされてゐる理由は、思ふに、その勢力が、地理的に兩者の中間

に位する他の諸土司と大差なかつたが爲めであらう。斯くして、明の中葉以後の緬甸は、朝貢國と土司との境界を彷徨してゐた。清初、吳三桂は、明の桂王を追ふて緬甸の國都に逼つたが、清朝としては、その目的が他に在つた爲に之に朝貢を強ひることをせず、又雍正間の事情より察すれば、緬甸側にも入貢の意志がなかつたことが解る。蓋し、これは、當時なほ中間に數多の土司諸國が介在してゐた爲め、兩者の間にまだ直接の利害關係を生ずるに至らなかつたからである。乾隆三十四年の老官屯の契約は始めて先づ緬甸の入貢を約し、次いで同じく五十三年に至り、貢期を定め、王號を賜つて朝貢國に列せられた。併し、その後の清朝の此の朝貢關係に對する態度は、甚だしく冷淡なものであつた。さて西方に關しては、「西藏問題」（同人、支那）がある。今日の西藏問題は實質的には領土の問題である。所謂チベットの疆域に就いては、支那人、西藏人、各々自己に都合の宜いやうに考へてゐて、必しも分明ではない。一體、支那人が西藏を支那の領土と考へるのは、清朝以來それが支那の

藩屬國であつたといふ歴史事實に基くものであるが、併し、此處には支那人の勢力は殆んど這入らなかつたから、之をしも直ちに支那の領土であるとは言ひ難い。冒頭して、康・雍・乾三代の西藏に對する懷柔政策が清末から共和政府へかけての領土擴張主義に變じた経緯を、支那・英國・西藏三者の巴狀關係の中に論述したものである。此の外西藏に關するものでは、「喇嘛教について」（須佐嘉樹、歴史教育）の研究や、西藏本を以つてした「蒙文金光明經所簡考補箋」（櫻部文鏡、支那學）があつた、ヒマラヤの北邊、インダスの上流地に在つた「女國の多夫婚姻に就て」（秋葉隆、社會學雜誌）は、通典に賤婦も數夫を有つてゐたことを記してゐる事實からして、これは、今も印度南方に残存するネイタ的非兄弟多夫婚であつたらしいことが言はれてゐる。更に轉じて北方方面ではさうかきいふに、先づ元魏・遼・金・元及び清のやうな支那の北族諸朝ここに「漢文明」（羽田亨、支那）との關係を論じた一篇がある。支那の全體を自分の勢力範圍に入れてしまひながら、然も支那の文明の感化を甚だ受けなかつた所の元の

朝廷は例外を以て、その他の諸朝廷は成るべく自分達の固有の文化を維持することに努めながらも、自然に漢文明の影響を受けるやうになつてしまつた。而して、こゝに注意すべきことは、漢文明の方でも、これらの諸朝廷の持つてゐた固有の文化から或る種の感化は受け入れてゐたことである。さて、これらの北族の中、「遼金の遺蹟とその文化」(鳥居龍藏、東洋文化)との間には、如何なる交渉が存するか。先づ、遼即ち契丹に滅された渤海の文化には、明らかに突厥の影響が見られるものがあることを指摘せねばならぬ。次に遼の上京の遺蹟に對して佛教考古學的研究を行つた結果から言へば、當時、契丹に密教が這入つてゐたことが解る。又滿洲蒙古の造形美術には、ベルシヤ、サラセン及び突厥の影響を認めることも出来る。更に金の上京の遺蹟を調査すると、金人も遼人と同じく、シャーマン教を奉じながら、側ら、遼から這入つて來た佛教を信じてゐたものらしい。金屬製の十字架の出土から想起されるキリスト教と金との關係に就いては、ネストリヤンと共に耶蘇教の分子が朔北の

地に這入つてゐたであらう事を豫告して置く。その他遼金その他北族の信仰を代表する「シャーマン教の創世傳説」(岡下大慧、民族)の研究、有名な「關特勤碑の解説」(須佐嘉樹、歴史教育)、旅行記として、「熱河赤峰の旅日記」(鴛淵一、歴史と地理)、「蒙古探險記」(中屋義之、東洋)などがある。最後の旅行記には、蒙古家屋の中、農民の家屋と蒙古包との構造の解説が見えてゐる。

西域史即ち中亞史 「龜茲シユルフト窟院の壁畫とその藝術思想」(小野玄妙、史學雜誌)の由來する所を併せて究めてみると、この壁畫を以つて限定的に賢愚經藝術の所産であることに對しては、稍々その見解の狭きに失するを覺える。寧ろこれは、大乘佛教と最も切密な關係を有し、概して西紀第三四世紀頃、西域特に支那新疆地方で盛んに行はれた本生談の藝術的表現と見るべきものであるといふ。「龜茲語の大光明王本生と其の古圖像に就いて」(同人、現代佛教)は、これが大約、西紀第四世紀前後のものであること、又、その根幹をなしてゐるものが、その頃此の地方に隆盛を極めた大乘菩薩六度の思想

信仰であることが考へられてゐる。西域の商胡重價を以て寶物を求める話(石田幹之助、民族)は唐代に廣布してゐた一種の説話である。「回紇衰亡考」(桑田六郎、東洋學報)は唐代の回紇以外に、遼史に見えたる回鶻、金史に見えたる回鶻、宋史に見えたる回鶻及び元の撒里畏吾兒と明の安定衛の往來始末を克明に研究してゐる。「中央亞細亞八千哩の高地横斷」(ウイリアム・ゼイ・モルドン、東洋)の記録は、印度のカシミール地方から、ミンタカ道を経て支那トルキスタンに出で、更に古城子からアルタイ山脈を起えた時の簡略な旅行記である。

西亞史及印度史 先づ「東西兩亞の文化關係と年代學說」(井上芳郎、同誌)は、東西兩亞の古代文化關係の研究は、悉く東方の學者の研究範圍に這入つて來ねはならぬ。而して、此の場合、その研究の骨子なるべきものは年代學的研究であるとして、埃及年代學の歴史を叙し、その實例から推して、これが如何に困難な事實であるかを述べたものである。古代民族や現代の野蠻未開乃至半開民族の間には、逆縁婚即ち兄弟の一人が妻を遺

して死んだ場合に、後に残つた其の男の兄弟が遺された寡婦と結婚する義務を負ひ、若しくは權利を獲得する風習、或ひはそれと類似の習俗が存在する。「近東古代民族の逆縁婚に關する法規に就いて」(松井了稔、龍谷大學論叢)及び「舊約に於ける逆縁婚の習俗と規定」(同人、同誌)に就いての一聯の研究は、印度のマヌの法典、ヒツチト族の法典、アツシリヤの法典及び舊約の申命記法等に所見する關係法規によつて、古代諸民族間に於ける逆縁婚習俗の異同を比較したものである。「黎軒と大秦」(藤田豊八、史林)に就いては、前者を *Maui* の本據、若くばその本據と稱する *Ragha* (*Rhage*) に擬定し、後者を或る外國の名稱に對する音譯と視て、古代波斯語の *Udina* (*Adj. (recht, dexter, Westen)*) に關係があらうとする新説が提唱された。唐代に、三面皆大食の狀勢の間に尙獨立の形と固有の拜火教を保持してゐた陀拔斯單 (*Tabaristan*、羅利支國 *Lais*、岐爾國 *Gulian*、涅滿國 *Dolman*、勃達國 *Badhsh*、都盤國 *Denwend*、阿波國 *Amol*、*Amur*、沙爾國 *Shalamba* 等、「カスピ海南岸の諸國」) 唐との交

通」(前島信次、史學雜誌)は、必しも政治的の意味を含むものではなく、單なる修好的・商業的の交際に過ぎなかつたといふことである。少しく東するに、「アフガニスタンに於ける玄奘三藏旅程の註解」(アルフレド・フシエ、佛教美術研究)、「迦膩色迦王問題」(羽溪了諦、龍谷大學論叢)の考究がある。後者はまだ未完結であつて、迦膩色

迦王以外の貴霜王の王數をそれらの年代決定を了したばかりではあるが、しかもなほ、他の、佛陀を中心とする宗教文化が産出せられるに到つた必然的根據である「佛陀時代の政治状態」(同人、宗教研究)の研究と共に、吾々の注意に價するものであらう。その他、インダス河流域に於けるインド・シユメル時代の遺跡發掘の結果を紀要した一九二七年版印度政廳考古學年報の中から、古代の象形文字を有する封印のこゝ、火葬風習の存在のこゝ、テラコッタ製の蛇のこゝ、語法が極めてよく日本語と一致するシユメル語のこゝなどを拾ひ集め、説き去り説き來つて「東洋文化の新報告と世界の反響」(井上芳郎、東洋)のこゝの問題に及んだもの。「印度佛教美術の發達」(アル

フレド・フシエ、佛教美術研究)、ギリシャ風な「初期の佛像、其起源、發生及び年代」(同人、同本)。さては、「印度更紗の原流」(新村出、佛教美術)などに關する研究が發表された。

南海史 一九二六年十一月十三日、孫中山の誕生日の翌日にバタビヤに勃發した「ジャバ共產主義暴動に就て」(瀨川龜、東亞經濟研究)の眞原因は、勞農ロシアの魔手がジャバ在住の支那青年―彼等は、彼等及び彼等の祖先がオランダ爲政者の土人懷柔策の犠牲になつて永く理由のない屈辱を蒙つて來た事に對する絶大の不平者であり、又、その主義に拘らない盲目的な孫文崇拜者である―を操つて仕出來たといふ點にあるといふ。最後に餘り肩のこらない「スマトラ縦斷記」(宇野圓空、現代佛教)を讀んでは、ありし日のメナンカバウ王國の跡を偲び、「アンコール廢墟最近の巡訪」(カンボヂヤに於ける佛教古代美術)(アルフレド・フシエ、佛教美術研究)の記錄をひもこいては、過去に覆はれてゐる壯麗の跡を眺め、それで一先づ此の長い巡禮を終らう。

附記、筆者は、本書の締切り間際に自身臥床するの止むなきに至つたため、二支那學論叢の名篇を録載し得なかつたことを甚だ残念に思ふ。唯、幸ひこゝ、狩野教授還曆記念の分には御承知のやうに既に「歴史と地理」誌七月號に、那波先生の懇切鄭重な御紹介があり、高瀬教授還曆記念のそれに對しても、近く同誌上に友人今石學士が紹介の勞を執られるやうに聞いてゐる。それ故是非これら二氏の御紹介を拙文と併せ讀んで頂きたい。さうすれば昨年度の我が東洋史學界の大勢はあらましお解りにならうかとも考へられる。「安部」

**西洋史** 昨年の西洋史界はあまり盛でなかつたばかりでなく、坂口、植村兩博士を失つて甚だ不幸であつた。殊に坂口博士を失つたことは京都帝大のみならず日本の西洋史界の大きな損失であつた。因みに同博士の學歴並びに業績に就いては、これを語るべき最適任者である中村善太郎氏が「故坂口博士の學歴とその業績」てふ一文を「史林」に寄せられてゐる。次に昨年の西洋史界を概観するにまづ著書の方面を見るに數から言つてはやゝ寂しい

觀がないでもないが少數は云へ充實した著作が現はれたのは心強い。經濟史、思想史の方面が賑かであつたのは注目される。以下自分の眼を通した範圍の者について簡単に紹介して見やう。古代に就いては「ギリシヤ史研究」(原隨園)があつた。本誌その他に載つた古代希臘關係の論文を集めたものであるが前半の五章はツッキュデス、ヘロドトス、ポリュビオス等の史學思想を述べ一貫した希臘史學史を爲し、後半六章では希臘諸家の理想國家の思想及び實生活についての考察を述べた。本誌に出た「ポリュビオスの史風」ルユクルグスの傳説「ソブヒスト」その時代」等も含まれて居り希臘史研究者を喜ばせた。尙同時代を扱つた「希臘古代文化史」(小林秀雄)は Bealin のギリシヤ史を基にして民族發生時代からアテネ民主政の末期までを説き波斯に關しても數章を割き、政治的發展を中心にしては居るが思想、經濟、藝術科學の方面にも適當な解説をなし、卷頭の希臘史研究資料に關する一章も有益である。從來必要を感じられて居ながらも見られなかつた古代希臘文化全般についての著述ミ

して喜ばしい。尙又文化方面の著作として「ローマの文化ミ建築」(森口多里)があつた。

中世及び近世初期に關する研究著述は殆んぞ見る事ができなかつたが最近世の方面では坪井九馬三博士の「最近政治外交史」(三卷)の大部の著作を得た。序編にアフリカ分割を説き第二編にはトルコ問題、伯林會議を中心に歐羅巴勢力のアジア方面への擴張、第三編はバルカン問題、三國同盟の経過を述べ第四編には前世紀末の列強の形勢から東アジアの問題に及び、三國同盟の東アジアに對する對度に亘り三國干渉で終つて居る。平易な文章ミ懇切な説述は大部な書に係らず興味深く讀まれ博士の所謂「外交ミは他を救濟する爲めに自己の小社會を犠牲にするミ言ふ如き事なくて、世界ミ云ふ大社會の保全を計らうミするもの」ミの意見がよくうかゞへる。更に本書以後の時代の政治外交史の成る日が待たれる。「世界大戦史講話」(森五六)は大戦前の武裝平和時代の概觀から説き起し休戦にまで及んで居る。著者は大戦中フランスに在り、しかも軍人であるから第二講の各國の軍事活動

の發展は興味が多い。附録には軍事方面の理解を助ける解説がある。滿鐵調査部が「露西亞に於けるボルシエヰイズムの發達史」を刊行したのも注目し價する。

各時代の特殊研究の少ない割に、概説的のものが多いのは毎年の例であるが今年も同様であり各方面に亘つてこの傾向が見られた。一般的のものとして「西洋文化史講話」(佐藤堅司)は古代東方よりルネッサンス時代に至るまでを政治、經濟、宗教、學問、藝術の各方面に分けて述べてある。手頃な通史としてよいものであつた。尙一般史的なものには「西洋史論」(阿刀田令造)、「批判的西洋時代史」(本多淺治郎)等があつた。經濟方面には「經濟史概論」(石濱知行)がある。歐洲經濟史概説ミ經濟史概論の二部に分ち唯物史觀に基づく著者の新しい經濟史を示した。就中歐洲經濟史の部分では序説に著者の史觀を述べた上、原始社會から資本主義的の近代社會に至るまでの經濟的發展を論述した。「英國資本主義成立史」(野村兼太郎)は先づ四十頁餘を費したその序文に於ける著者の歴史觀に注目される。本論は英國國民の由來から始ま

り、著者が商業史上近世初期の終末をなす轉換期なりとする一七六三年のバリ條約を以て結んで居る。又一「歐洲經濟史論」(關未代策)も出た。經濟關係の次の名著が適當なる譯者を得て邦語に移されたのは喜ばしい。厚く譯者の努力に感謝しなければならぬ。

「中世職人史」(ピエール・ブリゾン著、白井勝千代譯)

「國民經濟史」(ウイブルブランド著、菅野、四宮共譯)

「産業革命史論」(ノールス著、川西正鑑譯)

政治方面では英國憲政史に委しい占部百太郎博士が新に「英國政治組織」を著はした。「政治思想の變遷」(高橋清吾)は政治學の權威たる著者がその博學を傾けて古代希臘のソクラテス時代からレーニン、ムツソリーニの現代に至るまでの政治思想の變化を時代的背景を忘れる事なく跡づけ、且つ明快な批判をも伴つた近來の好著であつた。又宗教及美術史方面に次の二名著の翻譯があつた。

「比較宗教史概論」(ムーア著、菅園吉譯)

「伊太利ルネッサンスの藝術」(サイモンズ著、城崎詳

藏譯)

日本評論社によつて社會科學叢書の刊行が計畫されたが史學關係の著書も含まれ夫々専攻の士の手になり簡明な點で便利である。

「英國經濟史要」(本位田祥男)「社會思想史概説」(波多野鼎)

尙、岩波書店が「世界思想」の豫約刊行を行ひ既に十冊近くを出したがその中に、基督教思想、西洋思潮、羅馬精神、文藝復興、浪漫思潮等西洋史關係の論文も多く又著名なる思想家たごへばイエス、パウロ、ルツター、マキアヴェリ等の評傳もあり我々を喜ばせた。マルクス、レーニンの翻譯、及び是等に關する譯者群出の傾向は一昨年あたりから見られたが昨年同様で枚舉に暇がない程であつた。

次に雜誌論文の方面について云へば是も著書と同様に餘り賑かではなかつた。主要なるものを採録して見るこまづ古代では「古代埃及金屬考」(岡島誠太郎、歴史ミ地理)は古代埃及に於ける銅青銅金銀エレクトラム鐵錫鉛アンチモニー等について聖文字等を用ひてその流布の狀

態を記述し且つ詳細に出典を示して居る。『ネファアティ  
イ像ミアマルナ彫刻』について(同人、史林)は最近京  
都帝大所藏品となつた埃及第十八王朝のアクンアトン王  
妃ネファアティイ像摸本に關する解説であつて同時にこ  
の像が屬して居るアマルナ藝術―傳統に墮した埃及藝術  
に一時新生命を與へたアマルナ時代の概説も兼ねて居  
る。「アツスリア學概論」(中原與茂九郎譯、歴史地理)  
はセイス博士の原著の忠實なる譯註である。「希臘宗教思  
想の一考察」(寺澤保之、史學雜誌)は古代希臘の宗教的  
信仰の方面を希臘人の社會生活と關聯してデアレクタク  
に考察せんとするもので本論は筆者の意圖の一部分を爲  
したにすぎないが希臘思想ミクレタ、ミケーネ思想ミを  
農民の信仰について敘述したものである。次に中世に關  
するものでは「ビザンチン研究の過去及現在」(粟生武  
夫、法學論叢)はビザンチン研究の始祖たるHudboldに  
筆を起しビザンチン學派を説明しビザンチン法律史の眞  
の建設者たる Zachariae について述べ更にPapyrologieに  
刺戟されて勃興した新研究、Mittler及びその影響をのべ

て最後に懇切に最近の文献をあけて居る。中世末期に關  
するものには「ダンテの羅馬思想」(大類伸、史學雜誌)が  
興味深い。ダンテは都羅馬を單に一個獨自の町に見ず  
常に世界帝國的意義を持つ町として見て居る。法皇の都  
ミ云ふよりは寧ろ皇帝の都である、彼は帝王の權力ミ法  
皇のそれミを全然對立的な然し協和的なものを見それ故  
に法皇が羅馬を獨占して政教兩權を兼ねる事を不可なり  
とした。即ち古代中世を綜合調和した羅馬を考へて居る。  
又ダンテは世界的精神を説く中世的哲人であると同時に  
伊太利の國民的感情の鼓吹者でもあるがこの伊太利的感  
情は近世的な國民國家的感情ではなくて文化的民族的自  
覺である。故にダンテは中世の奴隸ではないが尙著しく  
中世的色彩を帯びて居る言ふのである。次に近世に關  
する者に於ては「ルネッサンス政治思想に及ぼせるマキ  
アベリの影響について」(デル・レー、村川堅太郎譯、同誌)  
はマキアベリの共和的感情ミ「君主論」を著した事との間  
の矛盾を夢想家としての彼ミ實際家としての彼の對立  
に歸し、「君主論」に現はるゝ所謂マキアベリズムも決し

て利己の群少主權者に見られぬ偉大さがあつて夫は彼の立場が歴史事實の彼一流の解釋——彼の人生主義的研究に基づいて居るからである。獨逸交通の先驅として、のミュンスター公僧正領の驛制（三井高陽、史林）は十六世紀末まで統一に乏しかつた歐洲の交通に十七世紀に入つて劃時代的な改革が行はれた際に普魯西驛制の統一並びに獨逸交通の先驅となつたミュンスター公僧正領の驛制の發達を述べて居る。「清教徒と猶太人問題」（菅原憲、歴史と地理）は一九一九年英軍のバレスティン占領の際に發表された外相バルフォアの宣言に筆を起し、猶太人に對しては英國が常に他國に先んじて好意を示して居る事を説き英國に於ける猶太人問題を略述し就中清教徒革命當時英國にメシア思想が流行したに乗じて猶太人の英國再入國を企てたマナツセ（一六〇四—一六五七）の運動について詳述して居る。露國農村土地共有制の史的考察（齋藤清太郎、史學雜誌）は十九世紀に於ける露國農村土地共有制の起原に就いて古代の制度の發達せるものとなすベリヤエフ一派の説き、古代制度と關係なく全

く別箇の原因に歸するチチェリン一派の説と二派あつたが何れも古代と現代とを連絡すべき史料不足の爲め不完全であつた所が最近に至つて記録によらずしてシベリアその他の地方の農村土地共有制の發達の比較研究によつて解決せんとする第三の學派が起つた事を述べて十九世紀に於ける露國農村土地共有制の内容を紹介して居る。最後に最近世に關する者では「一八一九年の露國憲法草案」（齋藤清太郎、史學雜誌）、露國皇帝アレクサンドル一世が一八一八年祕密結社の暴露、コツツビユー暗殺等に脅かされて自由思想を捨て、憲政施行の志を斷つたと言はれて居るが一八一九年の憲法草案によれば同年に至つて尙憲法施行の志のあつた事が窺はれる、但し是は近代的意味に於ける憲政ではなく又帝の意志も明確でない。憲法の内容からは是を説明して居る。大戰後公表されし重要な國際關係史料につきて（大村作次郎、史林）は世界大戰後主として大戰責任論に刺戟されて各國が外交文書を公表した爲めに從來史料缺乏で頗る不満足であつた最近國際關係史は全く面目を改めるに至つた。

て獨このカウツキー文集、Grosse Politik、イスヴォルスキー書簡集、等最近發表された各國の外交文書集を紹介して居る。「所謂獨乙戰責問題」(ワルター・バイエル―西田正一譯、史學雜誌)も看過し難い。「原、猪谷」

### 考 古 學 界

昭和三年度に於ける斯學の主要なる業績を顧みることには斯學の趨勢が果して那邊に向つてゐるかを想察することに於いて最も意義づけられるもの云へよう。

本邦發見の石器時代人々骨の研究は前年度に引續き益々其の進境を示してゐる。此等の個々の人骨測定が本邦人種論の基本的根底をなすものであることは今更ら云ふまでもない。「日本石器時代の變形頭蓋に就て」(清野謙次、金關丈夫、平井隆、人類學雜誌)にて愛知縣渥美郡吉胡矢崎貝塚發見人骨の例に基き「靜岡縣濱名郡入野村字蛸塚貝塚より發掘せる三頭蓋骨に就て」(平井隆、同誌)「吉胡貝塚人々骨の人類學的研究第一部頭蓋骨の研究」(金高勘次、同誌)備前國兒島郡粒江村貝塚より發掘せる石器時代頭蓋骨の人類學的研究(平井隆、同誌)「津雲貝

塚人々骨の人類學的研究、上肢骨に就て(清野謙次、平井隆、同誌)同上、下肢骨の研究(同上同誌)の外「福岡縣筑紫郡山家村の甕棺中より發見したる金石併用時代の人骨に就て」(平井隆、清野謙次、金關丈夫、同誌)は注意すべきものであつて、甕棺内發見人骨測定の嚆矢をなすもの云へる。此の人骨は石器時代人骨よりも古墳人骨に近接する點を認めてゐる。以上は遺跡發見の人骨に基く測定の發表であるが人類學的に此等を對象とするものに「人類學上から見たる日本民族」(小金井良精、同誌)は形態的人類學より論じ「日本人の體質」(足立文太郎、同誌)「日本人の身長體重及び胸圍の發育に就て」(吉田章信、同誌)現代日本人々骨の人類學的研究、下肢骨の研究(平井隆、田幡丈夫、同誌)所謂千鳥アイヌ族の現状と同種血球凝集反應に就て(平光五一、同誌)等あり、尙ほ一般の人類學的論述に「人類學の部門に關する諸説」(松村暎、同誌)「人類起原論」(清野謙次、金關丈夫共著)あり、後者は世界原人の研究を詳述するものであつて、日本原人の研究を基礎づける上に直間接に寄與するもの

である。「史前學研究史」(大山栢、史學)も亦た同様の意義を有する。「日本石器時代人研究」(清野謙次著)は過去數年以降自然科学的の骨骼測定に基く計數を立脚として「津雲石器時代人はアイヌ人なりや」「再び津雲貝塚石器時代人種に就きて」「日本石器時代人種に就きて」等の論考を提出されてゐる。果して日本石器時代人が此等の所論に合致すべきか否かは尙ほ將來に待つべきものであらうが、此等の論考を築かしたる種々の人骨測定記録は吾が石器時代人種研究の劃期的のものとして承認されるべく、近き將來に於いて此等の多くの研究が綜合せられ茲に始めて科學的研究による日本石器時代人研究の完成を告ぐるものであらう。「太古の日本民族に就て」(坪井九馬三、國學院雜誌)はこれに反して文献に基き解釋を與へたるものである。

次に當代の遺物遺跡を對象とするものに「日本石器時代遺物發見地名表」(東京帝國大學人類學教室編)あり、第四版の發刊以來約十年の歲月に於けるものを網羅するものであつて、換言すれば大正六年以降の十歳は本邦考古

學就中、石器時代遺跡研究の最も隆盛を極めたる時期であつて將に一時期を形成するものであつた。單に地名表に舉ぐるものだけでも前版に倍して約一萬ヶ所に及んでゐる。石器時代の遺物遺跡の調査として本邦の北部から舉げて見るに東北及與羽地方には喜田貞吉博士を主宰とする「東北文化の研究」が著しく其の機運を助勢せしめてゐる、陸奥國三戸郡是川村の遺跡から所謂、龜ヶ岡式に稱する繩紋土器と共存して編物、敷物、櫛、椀、木刀、木劍、弓等の木製品を發見し此等の遺物は少くも室町期をさかのほるものでないことがされてゐることは東北地方に於ける石器時代土器の下限を指示する特筆すべき興味ある發掘に云はねばならぬ。また、青森縣上北郡先住民族分布状態(成田券治、東北文化研究)「秋田縣生保内村の堅穴」(深澤多市、田口耕之助、同誌)「羽後國飽海郡飛鳥の石器時代の遺跡並に石壘」(阿部正巳、同誌)「仙北郡強首野に於ける先住民族遺跡に就て」(深澤多市、京極重美、同誌)「彌生式土器及石製模造品を出したる阿武隈川流域の一遺跡」(齋藤忠、同誌)等が所載せられて居り、此の間

「東北民族研究序論」(喜田貞吉、同誌)の所論を見るものがある。これと併せて「蝦夷編年史料」(同上、同誌)の抄出は文献考察に最も機宜を得たるものと云へる。又た「日高見國の研究」(同上、同誌)が出されてゐる。「陸前國氣仙郡の若干介塚の時代相乃至式別」(松本彦七郎、人類學雜誌)にて二日市、細浦、中澤濱の貝塚に基きてなす「鹽釜附近の先史時代遺跡」、原石探地取址(村主岩吉、考古學雜誌)「南佐久郡の考古學的調査」(八幡一郎著)は信濃國南佐久郡の遺物に基き主として繩紋土器の編年考察を試み合せて從來閑却されてゐる彌生式土器のものもこゝに企てゝゐることに於いて主眼とされる。即ち八群に分ち、第一(厚手式繩紋)第二(諸磯式繩紋)第三(中間式繩紋)第四(薄手式繩紋)第五(繩紋彌生式)第六(有紋彌生式)第七(刷毛紋彌生式)第八(無紋彌生式)等に移行するものであらうとする。編年考察の一つとして認むべきものである。尙ほ遺跡の「相」を強調されてゐるがこゝは從來の「式」を、論述に大差がないことが認められる。從來一般に閑却せられて居つた關東や東北地方の彌生式土器研究が著

しく注視せらるゝに至つたことは斯界の近時に於ける一趨勢として見逃すことは出来ない。「甲斐國北都留郡大月先史時代遺跡の研究」(仁科義男、史蹟名勝天然記念物)「甲斐國南都留郡寶村の遺跡」(同上、同誌)等あり、「埼玉縣柏崎村眞福寺貝塚調査報告」(甲野勇著)は主成貝殻が淡水産であることによつて、附近に點在する海水産貝塚との差異が史前海岸線の想定を容易ならめしめ、従つてこれらに基く編年の考察を試みてゐる。本報告は關東方面に於ける遺跡考察として最も出色とさるべきものであつて、從來容易に試みらるべくして着手せられなかつた此種の調査方法を企てつゝあることに於いて大山史前研究所の價値を認むべきであらう。「最近發見された貝輪入蓋附土器」(八幡一郎、人類學雜誌)は下總國東葛飾郡葛飾村古作貝塚發見の二個の蓋附土器の中に一は三十二他は十九の貝輪を藏し、下總餘山貝塚、神戸夢野の發見例と共に貝輪が特殊なる用途を有するものであることが窺はれる。「武藏國荏原郡池上町久ヶ原及びその附近に於ける彌生式遺跡」(中根君郎、考古學雜誌)あり、又た「靜岡

縣大宮町及其の附近の石器時代遺跡に就きて」（佐野武男、同誌）は約三十個所の遺跡を紹介し、「北三河の遺跡」（夏目一平、考古學雜誌）「最近發見の相模の遺跡」（赤星直忠、同誌）「飛彈の上代遺物雜記」（犬塚行藏、同誌）の外、「美濃國惠那郡福岡村の石器時代遺跡及び遺物」（林魁一、人類學雜誌）「美濃國上郡の異形石器」（同上、考古學雜誌）あり、更らに「三重縣桑名郡多度村袖井貝塚誌考」（鈴木敏雄、同誌）は彌生式系統のものであつて、祝部土器を混へ、この中より桃果及び木製品として下駄を發見してゐる。此種の發見は近時多きを加へ、後述する秋田地方、河内高井田、乃至大和平城宮址の諸例と共に土俗學上興味あるものであるが此地のもの最も古きをなすものと云へる。近畿地方に入るに攝津國三島郡高槻「攝津農場」に於いて彌生式遺跡の發見あり、石器を共存し特殊なる土器を出土することに於いて近畿の遺跡の古式とされる。又、近江國滋賀郡滋賀村に於ても精巧なる同式壺の數多を發見されてゐる。「唐古遺跡の研究」（上田三平、歴史と地理）「高市郡新澤村一遺跡」（吉田宇太郎、奈

良縣史蹟名勝天然記念物調査報告第十回報告）は何れも著名なる遺跡を更に詳述するもの、「奈良縣吉野郡大淀町下淵發見の打製石器について」（樋口清之、考古學雜誌）がある。近畿及其以西を題目とするものに「有史以前の近江」（島田貞彦、滋賀縣史蹟調査報告第一冊）は近畿として特殊の地形を有し、又た銅鐸の多數を發見する位置として史前及直後の敘述をなす。「上代近畿の文化に關する一考察」（直良信夫、中央史壇）、「山城を中心として見たる史前の近畿」（島田貞彦、好古趣味）「瀬戸内海沿岸に分布せる繩紋土器の研究」（直良信夫、歴史地理）等がある。何れも發見例の少い繩紋土器を基底として移行する文化相を論述するもの、「播磨國押部谷村元住吉山の遺跡について」（同上、人類學雜誌）は繩紋式土器の終末期と相定してゐる。「岡山縣邑久郡石器時代遺跡地名表」（赤枝小太治、考古學雜誌）は曩きの地名表には二個所を舉ぐるに當報告には十ヶ所を記してゐる。四國に於いては「伊豫國越智郡乃萬村阿方貝塚」（長山源雄、人類學雜誌）の一例が報告せられてゐるに過ぎない。又た「土器の製

作（柴田常恵、中央史壇）も見逃すことは出来ない。以上は主として諸雜誌に報告せられたものであつて、此外、各府縣調査報告に登載せられてゐるものがある。されど概して其の中心を原史及歴史時代に置いてゐるから茲には省略する。

次に所謂金石並用時代に轉するに外方文化との交渉を物語る遺物の發見少くなく、本邦上代文化の研究として最も興味ある時代をなすものも考へられる。南より眼を注ぐに「沖繩縣那覇市外城岳貝塚出土の明刀に就いて」（橋本増吉、史學）は從來その出土を傳へられてゐるものうち最も確實なる例證であつて、これが直ちに朝鮮乃至支那發見のそれと直間接に文化的交渉を物語るものであることは今茲に述べるまでもなからう。實に當代研究資料として貴重なる發見とせねばならぬ。北九州地方は當代遺跡遺物の發原地であるだけに其の研究の中心をなしてゐる。即ち「金石並用時代に於ける兩筑平野」（坂本眞鈴、考古學雜誌）にて筑前國朝倉郡三輪村栗田の甕棺内から細形銅劍の發見を報じ、同國筑紫郡山家村にてほ

ゝ完形の甕棺内人骨を發見する。これは本邦古代人骨研究上重要な資料を提供するものであつて、この人骨測定は嚮きに概報した結果を齎らされてゐる。「筑後國三井郡小郡發掘と傳ふる青銅戈」（中山平次郎、同誌）も亦た注意すべき報告である。「壹岐國考古通知」（松本友雄、同誌）は同國加良香美山貝塚甕棺附近發見の鏡鑑を報じてゐる。「北九州に於ける甕棺調査報告」（島田貞彦、水野清一、人類學雜誌）には筑前國筑紫、早良、朝倉、浮羽、三井各郡下に於ける甕棺分布と主要なる遺跡發掘を試みたものである。就中、久留米東櫛原町石丸の甕棺の口部接合部から碧玉製小管玉を十九個發見したることは甕棺共存遺物の研究として注意すべきものである。「爾後探集せる須玖岡本の甕棺遺物」（中山平次郎、考古學雜誌）にて特に紹介さるべきものは硝子製勾玉の發見であつて、

此種の發見は本例を以て嚆矢とすべく、長さ二寸八分弱、丁字頭を有することに於いて精品として特色づけられる。されば從來發表せられてゐる甕棺共存玉器類の遺跡は筑前國糸島郡怡土村大字三雲、同國筑紫郡春日村大字

須玖岡本の外に本例に前記の筑後國三井郡久留米市東橋原町の四例を算することが出来る。此地發見の玻璃製勾玉は蓋し當代研究に重要な意義を提供するものであらう。須玖岡本出土の鏡片研究(中山平次郎、同誌)は中山博士の多年努力により蒐集せる該遺跡發見の微少な鏡片の多數から推究して該遺跡發見の鏡鑑は少くも三十數面をかぞへ、三雲發見の三十五面と大差なきことを明らかにせられた。即ち重圍紋清白鏡二、内行花文清白鏡三以上、同上系統四、重圍清白鏡三以上、同上系統五、夔鳳鏡一、蟠螭鏡一、同上系統細文鏡(一)、方格葉文鏡一、重圍葉文鏡二、同上系統二、内行花紋細圍鏡一、星雲鏡四、其他不詳のもの數面を分類してゐる。以上は北九州に於ける當代遺跡遺物研究の發表であつたが當代に屬する本州のものに就いて見るに「備後に於ける青銅文化に就きて」(水野興圓、同誌)は從來青銅遺物發見の少い該地方にも御調郡上川邊村大字三郎丸字盾石發見の粗製組合式石棺を推せしむるものから細形銅劍の出土を報じ、尙ほ從來出所不明とさるゝ同郡八幡村御調八幡神

社藏のクリス形銅劍も前者に近い場所であるところからして一つの暗示を與へてゐる。銅鐸の新發見又た一二を報じ、尙ほ從來出土状態の不詳であつたものを調査するものが二三を越えてゐる。「石見新發見の銅鐸に就いて」(高橋直一、同誌)は石見國那智郡上府村字城山にて大正十一年發見に係るもの、「大和龍門村發見の銅鐸」(石田茂作、同誌)「和泉國泉北郡濱寺町發見の銅鐸」(島田貞彦、歴史と地理)此外、昨年度には播磨國明石郡垂水村投上から一個出土されてゐる。以上は新例とすべく更らに「閩賀發見の銅鐸とその出土状態」(直良信夫、考古學雜誌)及び「播磨國宍粟郡神戸村發見銅鐸」(辰馬悅藏、兵庫縣史蹟名勝天然記念物調査報告五輯)は同一のもの、播磨國神種發見の銅鐸(太田陸郎、考古學雜誌)「今津出土の銅鐸とその出土状態について」(直良信天、同誌)にて攝津國武庫郡今津町津門發見を「遠江銅鐸出土地の踏査」(山崎常磐、同誌)等それ／＼明らかにしてゐる。銅鐸の研究が近時益々精細を加へてゆくことは斯界の爲め最も喜ばしい現象と云はねばならぬ。此等は諸學者の努力の結果

果であるが就中梅原未治氏の近著「銅鐸の研究」が其の指示をなしてゐる。こゝを忘るゝこゝが出来ない。この銅鐸究明に最も意義づける傍證は銅劍銅銚と細線鋸齒紋鏡とがある。而かも後者の新發見として「河内國大縣發掘細線鋸齒文鏡雜記」(同誌)あり、尙ほ發表に接しないが朝鮮平壤附近にても同鏡の發見を齎らしてゐる。從來發表されてゐる同鏡の出土地を舉げて見るに前記の外、大和國南葛城郡吐田鄉村大字名柄、長門國豊浦郡安岡村富任字梶栗瀉(一)朝鮮慶尙北道慶州郡外東面入室里、西伯利亞沿海州シユコトウ附近である。この特異性を有する銅鏡の研究は必ずや吾が銅鐸の解決に至大なる光明を齎らすものであらうと考へる。「單式甕棺に關する一新資料」(直良信夫、同誌)は播磨國加古郡神野村の數例を報じ形少なるものは乳兒埋葬とし、其の土器手法に視部質のものあるにより恐らく時代之下降せるものにしてゐる。

如上に於て本邦の石器時代及び金石並用時代を推定せしめる主要なる報告の概觀を叙述したものであるが次に原史時代を通觀するに古墳調査が主要部分をなしてゐる

こゝは本邦當代研究にして無理からぬことである。而して本邦の古墳研究が本來の性質として偶發的發掘に俟つより外に其の本質を究めがたい事情から近來其の副葬遺物の個々及び既掘の主要古墳の調査が進められて來たことを否むこゝが出来ない。古墳關係の遺跡を叙するもの、方から見るに「栃木縣史蹟名勝天然記念物第三輯」に該縣下所在の古墳を記し、「上野に於ける□始元年鏡出土古墳」(森本六爾、考古學研究)は本邦古墳出土の記年銘鏡の三例の一つとして即ち甲斐國出土の赤烏元年、但馬國の泰始元年と共に著名なるものであつて、同國群馬郡大類村に所在し、明治四十二年の發掘にかゝるもの、圓墳にして粘土槨を推定され、鏡鑑四、鐵斧二、鐵槍一等を出土し、其の記年を西晋の泰始に嵌めて居る。「銚子塚を通じて觀たる上代文化の一考察」(上田三平、史學雜誌)は甲斐國東八代郡下曾根村の古墳群中の最大なる前方後圓墳の粗製石室から鏡鑑五、玉類(水晶製勾玉四)六、車輪石四、石劍二等何れもが近畿の盛行時代古墳遺物と關聯するこゝに於いて興味深く、この古墳の語る文化相を彼

此研究し上代に於ける一特殊墳を認めることが出来る。

「信濃國諏訪郡四賀村古岩窪原史時代遺跡に就いて」(兩角守一、考古學雜誌)には岩窟を利用して作られた古墳であつて、遺物として碧玉製模造刀子を出してゐるこゝが注意せられる。「甲斐國東八代郡下會根村丸山古墳」(小松眞一、史蹟名勝天然記念物)「神奈川縣都筑郡山内村石川の家形彫刻を有する横穴」(高橋光藏、同誌)「東京府南多摩郡鶴川村熊谷にて發見せる横穴」(上田三平、同誌)「相模馬堀横穴」(赤星直忠、考古學雜誌)「遠江國鎌田神明社附近の古墳群に就て」(西郷豊八、同誌)「奈良縣柳本町附近の横穴古墳群」(樋口清之、同誌)「奈良縣三輪町山ノ神遺跡研究」(同上、同誌)「奈良縣上市町の古墳」(上田三平、同誌)「攝津國蘆屋古墳調査報告」(長町彰、同誌)「大和國平城村出土の陶棺」(大高常彦、考古學研究)等の諸報告がある。「大和國北葛城郡浮穴村三倉堂の遺跡」(大高常彦、同誌)は注意すべき遺跡であつて、木棺の二個(近時更らに三個の木棺の並列を發見)と鈴鏡其他を發見したるものである。「河内高井田出土」下駄に就いて(森

下儀治、考古學雜誌)は特殊の遺物を出したこゝを報じてゐる。又た「周防國赤妻古墳並茶臼山古墳」(弘津史文、同誌)は周防に於ける主要なる古墳であつて、遺物の豊富なるを以て斯界に著名なるものであるが氏は更らに近藤清石等の發見記録を綜合して叙述したるものである。以上は各地に散在するもの、報告であるがこの間にあつて栃木、愛知、奈良、兵庫、福岡等の各府縣の史蹟調査の手になるもの、うち古墳調査に關するものが比較的多くを占めて居る。今ま主要なるもの、數例をあけ一々の記載を省略するこゝにする。羽黒の石棺、八幡山古墳(愛知縣史蹟名勝天然記念物調査報告第五、六)宮山、巢山、西山、花山塚、文殊院西、牽牛子塚、中尾山等の指定古墳(奈良縣に於ける指定史蹟第一冊)會下山二本松古墳(兵庫縣史蹟名勝天然記念物調査報告第五輯)古月百穴、出雲百穴(福岡縣史起調査報告)等が散見される。而して特に古墳遺物を對象とするものに鏡鑑類は前述した外に「六朝以前紀年鏡資料の増加」(高橋健自、考古學雜誌)として約六十例を挙げられてゐる。主として支那發見のも

のであるが此等のうち大半は京都の守屋孝藏氏の藏するものである。「防長漢式鏡の研究」(弘津史文著)にて現存する二十五面を詳述し、尙ほ不明の十四面に就いて記録を以て補つてゐる。「勾玉ミ鈴ミに就いて」(高橋健自、

考古學雜誌) 小持勾玉は楯形勾玉から形式化したものとし、この楯形勾玉は古墳出土なることに於いて小持勾玉の位置自から限定さるゝものあつて、多くが單獨出土するところは恐らく奉幣報賽の具であり、宗教的意義を有するものであらうとし、小持勾玉を以て古墳時代を溯るものでないことを推定する「鈴鏡について」(森本六爾、考古學研究)は從來發表されてゐる五十八面に就いて共存遺物として鈴釧、鈴杏葉の類が東部日本に多く、而して該方面の古墳出土鏡に仿製鏡の率高く、又た馬具を伴出するところの多いことからして一つの動的文化の遺物と認めてゐる。「本邦古墳發見の竈形土器」(島田貞彦、歴史と地理)は古墳副葬の特殊な明器として該遺物を考察し、「防長通信」(弘津史文、考古學雜誌)に周防國吉敷郡平川村發見の石製馬を報じ「琴柱形石製品に對する一二の考察」

(森本六爾、歴史と地理)と題し美濃八、近江一、大和二十五、阿波一、伯耆四の發見地の確實なるものを根據とし近畿地方の特殊遺品と認め其の起原を鹿角品に求めてゐる。「日本原始畫の新例に就いて」(谷川磐雄、同誌)「豊前國發見王氏作畫象鏡」(弘津史文、考古學雜誌)等が報告されてゐる。古墳關係以外のものでは僅かに「三河國田原町坪澤の窯趾」(藤城實治、史蹟名勝天然記念物)が見えるのみである。「日本考古學」(後藤守一著)は綜合的に叙述され、ここに主要なる遺跡遺物を網羅することに於いて大正年間に於ける斯界の發達を容易に窺はしめてゐる。

次に歴史時代に入るに其の範圍頗る擴大せられ、經塚、寺趾、古瓦、金石等多少とも資料を提供せざるものはない。昨年度は特に當代の天平文化に關するものが高潮せられたことを忘れてはならない。其の一例として「天平文化史論」(寧樂)に各方面のものを舉げてゐる。而して又、寺趾宮趾の組織的發掘各地に試みられ、此等は吾が上代歴史を究明する上に頗る重要な資料を提供してゐる。

る。昨年度に行はれた主要なる發掘調査を見るに山城國相樂郡加茂村瓶ノ原宮趾、山城國平安宮趾、京都市外西院村淳和院趾等の調査（以上京都府史蹟調査會發掘）平城宮趾（奈良縣史蹟調査會發掘）の外、近江國傳崇福寺趾（滋賀縣史蹟調査會發掘）等は最も注意さるべきものであらう。就中、近江滋賀里の發掘に於ては彌勒堂を俗稱する山丘に於いて瓦積基壇を有する四間五面の礎石を古瓦、土塔、古錢（特に乾元大寶百數十枚を壺中に納れしもの）等の多數を發見し、更らに山麓の滋賀里字勸學堂附近にて方四十尺の同様瓦積基壇を有するもの二例を發見し、而かも同所附近にて精巧なる彌生式土器壺の集群するものがあつた。此等の綜合的調査は次年度に於いて該縣史報告として出刊さるゝ筈であるが興味ある多くの題目を提出すべきものであらう。扱て寺趾方面から見ると「法隆寺五重塔下の空洞を非再建問題」（關野貞、史學雜誌）は尙ほ容易に解決を見ないものであつて、氏は中心柱の下部切斷は和銅のとき、又た山丘狀は鎌倉期の修覆とし、空洞發見の古瓦を以て法隆寺最初のものなりとされ、今

の若草塔趾の地に一大寺ありこれを斑鳩大寺に當て、斑鳩寺が即ち今日の法隆寺にして、釋迦三尊佛は若草の伽藍の本尊なりしものが一屋無餘の火災は蓋しこの堂塔であつて後ち法隆寺に合併せられたものであらうとする。この外各府縣の史蹟調査の手により調査せられてゐるものが後述する様に比較的多くを占めてゐる。特に國分寺趾のものが目につく。即ち「筑後國分寺趾」（武藤直治、福岡縣史蹟調査報告）、「法性寺及五大堂」（西田直二郎、京都府史蹟調査報告第九冊）の考究あり、「添上郡帶解町下バコロ廢寺石造相輪」（岸熊吉、奈良縣史蹟名勝天然記念物調査報告第十回報告）は注意すべく、廢寺は三重塔であつて、全長約七十尺、木造にして石造の相輪を附し、奈良時代前期と推定せしめてゐる。この石材を特に撰んだ理由として恐らく加工に適當なるものが容易に得られた經濟的關係でなからうかゞされてゐる。尙ほ又た此地附近の堂塔配置の基壇に瓦積のあることは曩きに記せる近江國傳崇福寺趾のものと同様手法をなしてゐることに建築史上の好例を出すものと云へる。大和に於ける平城

宮趾、山田寺、川原寺、大宮大寺、元藥師寺、巨勢寺塔、栗原寺、大安寺塔、毛原廢寺、高宮廢寺趾等の指定史蹟を更らに叙述するものがある。(上田三平、奈良縣に於ける指定史蹟第二冊)これと同様のものに紀伊國分寺、同西國分塔、讚岐國分寺、同國分尼寺、總爪塔に就いて「新に指定せられたる和歌山、香川、岡山三縣の史蹟」(上田三平、史蹟名勝天然記念物)を題し詳述されてゐる。此外「淡路國分寺遺趾」(魚澄總五郎、同誌)、「佐渡國分寺址」(諸田八百七、同誌)、「山王廢寺趾の塔婆心礎に就て」(同上、同誌)、「尾張淵高廢寺」(森徳一郎、同誌)等が散見される。「平城宮趾の新發掘に就て」(溝邊文和、好古趣味)は大極殿趾東北の通溝から木製下駄、陶器、錢貨、古瓦等を發見し、下駄は既述するものと關聯して興味ある資料である外に、祝部式土器には「此院私家云々」又は「内省」省等を墨書するものがある。而して此地出土の土器は一般に當代の加作を知る上に適例を示すものと考えられる。古瓦を以て「粉河寺出土銘瓦」(前田長三郎、考古學雜誌)は平瓦の一つに正平癸卯勸進覺元上人云々の記録

があるもの。「奈良時代の唐草瓦に就いて」(石田茂作、寧樂)あり。古錢關係には「和銅開珍、萬年通寶、神功開寶の三錢貨の分布に就て」(入田整三、同誌)「奈良朝時代の鑄錢に就いて」(佐藤虎雄)等が見える。次に經塚關係を記すに「元久紀年の經筒」(深澤多市、同誌)に秋田縣仙北、金澤山附近出土のものを「阿波板西町發見鐵製經筒」(田所市太、同誌)「大和吉野郡天川村河合の經塚」(上田三平、同誌)「紀州比井崎王子社藏の經塚遺物」(石田茂作、同誌)あつて、この後者のものは法華經の八卷ほゞ完存し、何れも保元三年の奥書あるものであつて、此種の發見遺物として代表的のもの云へる。又た「山城國花背發見の經塚に就いて」(島田貞彦、歴史と地理)は經塚集群地を以て著名なる所にて更らに第六、第七兩遺蹟を發見し、前者から唐草文様を沈絞する陶筒、銅製小鈴、五銖銚、古錢(主として皇朝錢)を出土し、就中陶筒の紋様は此種發見のものとして最も精麗なるものである。後者から仁平三年の記銘筒を出したことを報じてゐる。那智發掘佛教遺物の研究」(石田茂作、東京帝室博物館學報第

五冊)は此種の遺物研究として注目すべきものと云へる。其の豊富なる遺物は此の遺蹟を以て最大とすべきものであつて、金銅製佛像、三昧耶形、佛具、經筒、和鏡、古錢等を含み、平安時代以降鎌倉、足利時代に亙りて埋加せられた一大規模の經塚であつて、築成當初は佛教大壇關係の諸器を含んだ供養の跡と推せられてゐる。氏は此地發見の佛像手法の差異を以て恐らく古代熊野を中心とする文化の存在してあつたものでなからうかとしてゐる。金石として「大分縣發見の銅板法華經に就いて」(田中一松、考古學雜誌)に豊後國西國東郡長安寺發見の元と三十八枚ありしうち十九枚に就いて詳述するものであつて、これには保延七年歲次辛酉四月二十八日始之、同年九月十四日供養畢の記録を有し、從來紹介されてゐる豊前國國玉神社藏の「康治元年歲次壬戌九月二十四日己時書寫畢」康治元年十月二十一日供養畢と共ニ銅板經の好例と云へる。「日向國飫肥中尾の供養碑」(瀬之口傳九郎、同誌)「日向國名谷觀音堂の鰐口」(同上、同誌)「山城木津の古銘文」(高田十郎、同誌)「大和金石文の補遺」

(同上、同誌)「大和生駒郡大田村山田の金石文」(京谷康信、同誌)「多武峯通信」(吉井良地、同誌)「三浦記」(赤星直忠、同誌)「下野金石志」(丸山瓦金、同誌及史蹟名勝天然記念物)等に紹介されてゐる。又た石彫遺物として頭塔、字智川磨崖碑、春日山石窟佛、地獄谷石佛等の「奈良縣に於ける指定史蹟第一冊」(上田三平著)としてまとめられてゐる。「板碑に彫刻せられたる器具」(三輪善之助、考古學研究)に天蓋及び法具等を詳述してゐる。石塔婆として「信濃國小縣郡の石造多寶塔」(小山眞夫、考古學雜誌)及び「鎌倉の寶篋印塔」(跡部直治、史蹟名勝天然記念物)には鎌倉町二階堂瑞泉寺裏山の塔の窪の二十基及び近在する在銘塔七基其他點在する室町期のものに就いて詳述する處がある。「高野の石卒都婆」(勝田天哉、同誌)は同山の一町から百八十町に至る一々の町石の刻銘を列擧されてゐる。「飛鳥奈良時代に於ける日鮮文化の交渉」(石田茂作、考古學雜誌)は當代に屬する佛像、古瓦、寺趾塔、骨壺等の遺物と書紀、續紀に記載せられた任那、百濟、新羅、高句麗に關する文献と待つて、日鮮

文化の類似點は飛鳥時代以降密より疎になりしものこし、奈良時代には半島との交渉疎んぜられたに比し唐朝に密であつたを考へ、所謂天平文化は近畿のものであつて、地方にあつては尙ほ朝鮮の影響を認めるものであるとするもの。又た一縣下の條理を研究したるものが（永山卯三郎、岡山縣史蹟調査報告第七冊）ある。基督教關係のものとして攝津三島郡見山村で「くほまりや」云々の墓石發見を報じてゐる外に「京都南禪寺の位置推定に依る二史實の解明」（柴謙太郎、歴史地理）は永祿六年（西紀一五六三年）に來朝したルイス、フロイスの記述した「日本史」其他の史料によつて、從來舊南禪寺の位習は四條坊門、石垣町、だいうす町乃至五條坊門の四個所に擬せられてゐるが氏は恐らく今の新町蛸薬師に當る姥柳町北側に推定されてゐる。

以上は本邦に發生した諸問題の概要を盡したものであるが更に隣接諸國に於けるものに視野を向けて見よう。大正以降の朝鮮半島に於ける考古學的調査は本邦のそれを嚮導するものであつたことは誰れ人も異論のない

處であつて、南北兩鮮に於ける重要な遺跡發掘の何れもが其の成果を齎らしてゐるものであつて、昨年度に於いては調査報告の公刊せらるゝものがなかつたが近き將來には嚮きに上冊の出版を見たる南鮮慶州金冠塚遺寶の下冊及樂浪王肝墓古墳調査報告に接するものがあるであらう。「朝鮮美術模様集成」（鹿鳴莊編）續刊の外に「高句麗の平壤城及び長安城に就いて」（關野貞、史學雜誌）あり、種々の考證を遺物により高句麗が始めて平壤に都せし時は大城山を中心としたものであつて、當時の王宮は清岩里の土城なるべしとし、長安城は今の平壤に當るものささる。「樂浪封泥の話」（同上、大阪朝日新聞）に從來同地出土のものが平易に解釋せられてゐる。

支那方面に入るに論考益々多きを占め、將に本邦考古學の中心は支那を基礎とする東亞に向つて進められて居り、而かも此の分野に於ては既に諸外國の斯學者の熱心に注視するものであつて、最近に於てはアンダーソン、コズロフ、リサン、乃至ロストフツエツ氏等は其の代表的の人々を云へる。近時蒙古一帶の北疆探究は益々支那

本國乃至北方民族として甚しき特異性を有するスキタイ文化との彼此交渉が注視せらるゝに至つた。東亞に於ける舊石器時代遺物存在の確證は一九二〇年寧夏府紅沙鋪發見のそれを以て嚆矢とされるが其後同所附近の水洞溝涇陽府新家口、趙家塞乃至オールドス附近にて究明せらるゝものがありリサン博士の「天津北疆博物院の古生物學的並に考古學的事業」(小川琢治譯、人類學雜誌)に紹介さるゝ處である。又た新石器時代遺跡遺物は全支那を始め各所に出土を報じてゐるが、當代に關する最も組織的の發掘があつた南滿洲貔子窩遺跡發掘は當代の支那考古學研究の基礎となるべきものであらう。こは次年度に於ける最も意義づけられる報告となるべきものと考へる。

一九二三年以降數回、外蒙古に於いてコズロフ氏の墳墓發掘あつて、支那本國及び樂浪發見のそれと類似するものあつて、著しく斯界の注視を向けしめたものであつたが「北蒙古發見の漢代の漆器」(梅原末治、大阪毎日新聞)はコズロフ氏がノイン、ウラにて發見せる多數の漆器は朝鮮樂浪出土のそれと酷似し、ここに其の一つには梅原

氏の調査によつて「建平五年九月(紀元前二年)工王濼經、畫工獲壺、天武省云々の刻銘を明らかにすることを報じてゐる。「シベリアから滿蒙まで」(鳥居龍藏、同上)の調査紀行がある。次に支那本國の遺物を題目とするものに「支那の古玉器と日本の勾玉」(濱田耕作、考古學論叢)は支那人の玉を愛するはこれを陽精又は九德とする石質の美以外に邊域から輸入するに云ふ稀少なるに基き日本發見の約八割が硬玉なるは古代南方支那との交通を暗示するものであるとするのは軟玉は主として新疆省に硬玉は雲南西藏及緬甸に産する爲めである。而して此等交通中絶等の理由によつて本邦では代用品として碧玉を主用するに至り、支那文化の極端なる模倣時代に於いて傳統的日本固有の佩玉をなしたことは特異性と認むるべきものであらうとする。「鼎と鬲に就いて」(同上、支那學論叢)は兩者とも支那古代器體の主要なるものであるが特に鬲形に於いては支那固有の器體に基くものであるとされてゐる。「漢代の騎射狩獵圖に就いて」(原田淑人、史林)に漢代の騎射狩獵圖の意匠はスキタイ文化を有する

北方民族の影響によるとする論述に最近發見の新例を擧げ「漢代の金畫飾銅盤に就いて」(同上、史學雜誌)は細川侯爵將來の該銅盤の金畫飾手法をロストフツエツ氏は金象眼としてゐるがこれは金臙又は金田箔に屬するものであるとす。「漢代の釉陶甗」(同上、民族)「漢代の僧絹」(同上、考古學論叢)の後者は樂浪、スタイン氏の樓蘭地方、コズロフ氏の外蒙古發見のそれらに基き前漢代以降、山東が絹布産出の地なることを告げ、特に樂浪發見のそれが絞紗の一種と平織であることを明かにし、凡て家蠶糸を以て前者は所謂空引機を後者は居坐機に類する織機でなされたものであらうと推するもの「中國之銅器時代」(馬衡、同誌)「模製考古記車制述略」(羅庸、同誌)の後者は「支那古代の車制」(矢島恭介、考古學雜誌)と同一問題であつてこれは考古記を基礎とし、畫象石、畫像鏡等の漢代遺物に現はれてゐるものを傍證として論據を進め詳密なる推測を考古記に試みて比較的計數の確實なる兵車を復原したるものである。「饗餼紋の原義に就て」(石田幹之助、同誌)は支那上代紋様として最も普遍

的に現はれてゐる饗餼には蚩尤、猛犬、人面の三説あるが何れも一元乃至一様説であるとし、恐らく人面、就中、眼を中心とした邪視(eye)から便化せられたものでなからうかとする。「支那の史料に現はれたる我が古代」(橋本増吉、史學)「魏志倭人傳の「生口」」(中山平次郎、考古學雜誌)等は文献を主としたるものである。「長安三年の石佛阿彌陀三尊」(津田敬武、同誌)「直隸省易縣舊在の陶羅漢に就いて」(原田淑人、同誌)等は佛像に關するものであつて、前者は陝西省西安府咸寧縣安仁坊の寶慶寺藏石彫を詳述し唐代に於ける淨土教の一道場であつたことを後者はも直隸省保定道易縣、清朝の西陵附近の山中に存在せしものが一九一三年以降發見されて歐米の博物館に收藏する陶製三彩釉の等身像であつて、何れも唐代の製作なりとしてゐるが氏は佛像個數の十六乃至十八個の推定は唐末五代以降宋代であつて且つ佛像内から朱錢の發見すること、佛像手法の著しく宋畫の西金居士眞蹟十六羅漢に相似することから宋代の遺物ならんと推定するものである。

以上、支那方面に於ける斯界の概況を記述したが茲に特記すべきことは東亞考古學會第二次の遺跡地發掘調査である。昭和二年四月その第一次發掘を南滿洲貔子窩遺跡に試み頗る見るべき業績を挙げたることは昨年度の斯界に概報する處であり、近く其の本報告に接するもので

あることは既述する處であつた。第二次發掘は昭和三年十月、南滿洲旅順管内牧羊城址遺跡を中心として附近に點在する貝墓其他の漢代遺跡の發掘であつて、これ又た東亞の考古學界に寄與する處が鮮くはない。「南滿洲牧羊城址發掘概報」(島田貞彦、歴史と地理)本報告は東京帝國大學文學部原田淑人氏の手により今や着々其の整理を遂行されつゝあるを聞く。次年度に於ける主要なる業績の一つであることを斯界の爲に慶賀に堪へない。

他方、支那出土の遺物を圖版として紹介するものに「考古圖編第二」(東京帝國大學文學部考古學教室編)「考古圖録」(京都帝國大學文學部考古學教室編)がある。前者は支那發見の石器、玉器、漢陶壺、俑、唐俑、銅製遺物等約三十葉を納めるもの後者は同教室に所藏する支那發見

の先史時代以降漢以前、漢及六朝時代、唐、宋時代に至る遺物を網羅する外に日本乃至朝鮮及諸外國發見品をも併せたるもの、又た「唐宋精華」(山中商會編)は歐米等の博物館及び個人所藏となれる支那出土遺物の唐宋間に互る繪畫彫刻等を收藏するものである。

以上は支那を中心してのものであつたが更らに南洋方面を見るに土俗學的調査が重きをなしてゐる。即ち「馬來民族常用の短劍クリスに就いて」(松浦歡一郎、考古學雜誌)、「トコベイ島民に就いて」(長谷部言人、人類學雜誌)、「西部ミクロネシア人の文身」(同上、同誌)はトコベイ、ソンスル、ブル及びメール、パラウ、ヤップ、モクモク、ファイス其他の島民の文身を「サイバン、ティニア」兩島の遺物及遺跡」(同上、同誌)等が散見せられる。上來記載する處によつて不充分ながらも昭和三年度に於ける斯界の大勢を察知するものがあつた。即ち本邦にあつては石器時代の究明は漸く基本的調査に移り繩紋及彌生式土器の編年的考察今や高潮せられんごし、更に東北及奥羽方面の遺跡に注意すべきものがある。人骨測

定に基く同代人種論の解決は歩を進めつゝある。金石並  
用時代の究明は益々盛行を來してゐる。蓋し本邦の青銅  
文化にして且つ古代文化の黎明期として軌近必然的に究  
明を促されつゝあるものに外ならない。原史時代として  
古墳出土遺物の綜合的推究によつて著しく其の本質が明  
らかにせられて來た。歴史時代として各地に存在する寺  
址、就中國分寺及び其れに關係するものが調査せられて  
ゐることを趨勢とし見逃すことが出來ない。朝鮮に於い  
ては著しい特質を見るこゝが出來なかつたが南北兩鮮の  
遺蹟遺物が日本及び支那の連鎖に立ち斯學に多大の貢獻  
をなすものであつたこゝは繰り返して云ふまでもなく、  
斯界の形勢をして一躍進なさしめて東亞に視界を向けし  
めた劃期的のものであることを忘るゝこゝは出來ない。

東亞方面に於ける斯學の究明は大谷光瑞氏を除いては  
從來全く西人學者によつて探究せられて居り、即ちスタ  
イン氏の新疆、甘肅就中、燧燧及びミラン其他の地方を  
ペリオ氏の燧燧、グリユンウエーデル、ルコツク兩氏の  
庫車、吐魯番地方、オルデンブルグ氏の前地の外、喀喇

沙爾地方に、コズロフ氏の西夏カラホト乃至北蒙古地方、  
アンダーソン氏の河南、甘肅地方等の諸發掘は誰れ人も  
容易に指摘せられる。要するに支那を立脚とする東亞の  
考古學は此等西人の諸學者に一步先んぜられたるもので  
あつたが將來東亞の斯學が吾が手によつて堅實な地位を  
築成すべき使命に立つものであるこゝが軌近斯學の業績  
から窺知する事が出來ることを喜ばざるを得ない〔島田〕

## 地 理 學 界

昭和三年度に於ける地理學界は自然及び人文兩方面に  
互つて頗る盛んなるものがあつた。特に昨年七月英國  
に於て行はれた國際地理學大會には我國より十數名の權  
威を派し從來辛うじて二三名の出席を見るに過ぎなかつ  
たのに比し實に隔世の感あり我が地理學界の世界的進出  
も見るを得べく斯界の爲め誠に慶すべき年であつた。

扱て自然地理學方面の業績を通觀するに一昨年度奥丹後  
地震の直後地殻構造上の議論頗る斯界を賑はした後を承  
けて昨年も其の方面に關する傾聽すべき論文を數多く聽  
くこゝが出來た。然かも問題の中心は漸く地塊傾斜運動

に向ひ、「地塊の活傾動」(山崎直方、地理學評論)に於て、動きつゝある大地は是を急性的活傾動と慢性的活傾動とに分ち得べく、越後の西部糸魚川より東北に向ひ海岸に沿ふて直江津より柏崎に至る間の水準測量の結果四十キロメートルの所に於て最大一一三ミリメートルの傾斜運動を三十年間に行つた事を知り慢性的傾動の甚だ規則正しくして地震の場合に起る急性的傾動と全く同じ形である事を論じ、「地塊運動の物理的考察」(石本巳四雄、同誌)は地塊相互間の運動は勿論傾斜運動の他に垂直水平運動の存在する事は論を俟たない事であつて、垂直運動は水準測量に依り其の目的が半ば達せられるが水平運動の絶對的測定に近いと思はれるものは重力變化測定に基準するものであつて、其の變動の機構に關しては多少の考察を必要とせずし、先づ岩石圈の下層及び次下層の物質の物理的性狀より兩者の相對的比重の相違に依り地塊の垂直的移動は説明し得らるゝものとした。而して過去數度の大地震に例を取り地塊の運動と岩漿の移動とは同時に起る現象であつて地震に關した氣壓の勾配は次

下層に於ける岩漿の移動を意味してゐるを論斷した。次に「日本島弧に於ける地殻運動に就いての「假定」(船越素一、地球)は、漂移説に基き日本島弧の關東及び近畿の地變を論じたものであつて島弧の生成に當つた外力を説明し其の結果として地塊の分離を來し、其後地殻の伸張作用の爲め朝鮮海峽を成立せしめたが反つて地殻の彈性的反撥運動の爲めに中部地塊に衝突を起さしめて並行せる幾多の斷裂線を副生或は回生せしめ一方下層に於ける岩漿は此の力に依つて上層地殻との間に於て垂直及び水平の歪みを生じ其の均衡が破れた時に地形的變動を來し地震波を顯すものであるとした。而して是に基いて西部地塊と中部地塊との關係及び關東地塊と中部地塊東北地塊との關係を論じて地震問題に及び新期火山の噴出も其の壓縮作用に依るものであるとした。故に本邦に於ける火山噴出は必ずしも弧狀山脈に沿はず火山帶或は火山脈なる名稱は不合理なりとして火山噴出區を提議してゐる。其他地殻構造乃至は運動に關する業績としては「新生代に於ける日本海アルカリ岩石區の地殻運動と火山活

動(山成不二磨、地學雜誌)、「海蝕台地の變位より見たる撓曲運動と傾斜運動」(今村學郎、地理學評論)、「奥尻島の海成段丘と其の交代の傾斜運動」(渡邊光、同誌)、「海岸線の垂直移動と水平移動及びそのユースタティックとの關係」(今村學郎、同誌)等の新しき學說に基いた卓説を數多く聽くことが出來た。又此の方面に關する著書としては「ジョリー説による地殼の輪廻」(原田準平)あり、ジョリー博士の地球の表面史を譯し猶ほ多少の新研究を挿入して構成されてある。「地球の内部に關する今日の知識」(松山基範)は今古書院地理學バンフレットとして出された、僅かに四〇頁の小冊ではあるが、地球内部の状態を最も良く總括した誠に小氣味良い著書である。次に造山問題に關しては「造山現象に關する二三の學說に就いて」(上治寅次郎、地理教育)と題して地殼の變動は之を造山期と靜穩期と造陸期の三期に分ち得るを、世界各地の造山期を説明して日本に論及し地質學地史學上數回に亙つて行はれた造山運動に依つて生じた山脈を褶曲山脈、被覆褶曲山脈、斷層褶曲山脈、斷層山脈の四種に

分ち其の褶曲地の造山壓に關するデービソン、ジュース、コーベル、チャムバリン、ステイレ等の歐米學者の説を舉げ更に此等の諸說に超越した小川教授の造山説を紹介してゐる。猶ほ收縮造山説、放射能造山説、漂移造山説等を述べて造山現象に關する學說を平易に餘す處なく纏めてある。「コーベル氏の山脈論」(帷子二郎、同誌)は一昨年來引續き書かれたものであり、「亞細亞東部に於ける造山型式」(徳田貞一、同誌)は造山現象の研究に當り單なる想像力の區域を脱して物理學的な實驗に入るべきを指摘し、地江りの形狀乃至は板上に糊着された紙を指頭にて押して爲された實驗に依り東亞の造山形態が曳裂弧と壓縮弧よりなる島弧對海盆の形態なる事に注意して扇狀體に關する新説を發表された。昭和三年二月日本地理學會に於ける講演の一節を纏めたものである。地震に關しては一昨年の奥丹後地震に關する議論の上下の後を承けて昨年は正に其の總決算の年でもあつた。「奥丹後地震被害説明書」(本間不二男、地球)は卷頭に精細なる地震被害分布圖を挿入して之を説明したものである。此の圖

の製作に當つての勞作を述べ、圖上に表れたる幾つかの特徴を指摘された。且つ斷層は一個の生物の如きもので幼老病死の性質を有してゐる、此の性質は其の斷層が在存する處の地質學的位置に依つて大要決定さるべきものであると論斷されてゐる。猶ほ地震被害分布圖は多數の人力を精細なる努力を調査に依つて完成された貴重な資料であつて斯學に貢獻する所も大なるものがあらう。「丹後地震と其の地變」(渡邊久吉、佐藤戈正、地學雜誌)は地震の顛末を精細に記録したるものであつて、第一章を地震を題し、初震より餘震、鳴動、物體の倒潰方向、及び廻轉を記し、第二章を地變として幾多の斷層を擧げて精しくデータを拾集した事は多ししなければならぬ。其他「安政及び寶永大地震の震源に就いて」(中村左衛門太郎、地球)、「地質上より見たる札幌附近の地震」(渡瀬正三郎、地球)、「昭和二年十月十七日の中越強震に就いて」(國富信一、地理教育)等が散見された。猶ほ著書としては松山博士の「關東大地震の真相」に云ふ地球物理學的見地から關東地震を解釋したパンフレットが

出た。火山、温泉に關しては「北日本の火山帶」(大橋良一、地球)に於て、地震は地構線或は地裂線に沿ふて發生する爲めに從來唱へられて來た外側地震帶と内側地震帶といふ考へ方を棄て、造山帶に一致する地震帶を設定すべきであるとした。火山帶も此の造山帶に關連して考慮すべきであるとした。而して火山を淺岩漿噴出火山と深岩漿噴出火山とに區別し、我國の火山の多くは前者に屬して其の噴出原因をシアル層下變質帶中に起る瓦斯の會合に依つて熔融された岩石に依るものであると論じた。以上の論據に基いて北日本に於ける火山帶を造山帶と關連せしめて設定してゐる。ドウベニーの火山論に現れた本邦の火山(早坂一郎、地理教育)はドウベニーが百餘年以前英國に於て出版した「火山論」の内より我國に關する火山記録を譯出紹介しにものであり、「淺間火山」(八木貞助、同誌)、「寒風山の火山學的位置」(津田秀郎、同誌)、「三宅島火山噴出物の研究」(神津俣祐、地球)、「花岡鑛山の珪鑛中に含まるゝ火山彈」(大橋良一、地球)、「樺太豊眞鐵道の泥火山」(齋藤文雄)等があり、著書とし

ては「本邦各火山文獻集」(原田準平)を擧げる事が出来る。温泉に關しては、「温泉の湧出曲線に就いて」(石川成章、地球)を題して温泉の湧出曲線を見出して實際的應用を説き、「臺灣に於ける温泉の分布」(大江二郎、地學雜誌)は臺灣に於ける温泉の分布を地方廳の報告資料に依り調査し之を地圖にプロットして地質構造に關する問題解決の手がかりを得んことを、「本邦油田に於ける温泉」(千谷好之助、同誌)は本邦に於て石油試掘の目的を以て掘鑿せる結果、温泉湧出して現に浴場として經營せらるゝもの、及び曾て湧出し現在廢井の状態にあるもの其自然に湧出して浴場たるものを枚舉して其の地方の地質構造を論じ泉質を調査してあるが昨年度に於て結論を得なかつた。其他「信濃國小縣郡に於ける三四の温泉の温度及び湧出量の長期に互れる測定の結果に就いて」(片岡山人、地球)、「鬼首吹上温泉を訪ねて」(坪谷幸六、地理教育)等貴重な研究があつた。次は地形學に關する研究を概観して見やう。昨年度の地理學界は其の中心を地形學に向けたかの觀を呈した程此の方面には傾聽

すべき幾多の業績があつた。限りある紙面に於て此等の總てに互つて一々紹介批判の筆を向ける事は不可能であつて、勢ひ表題のみを羅列して餘白を徒らに埋めるに過ぎない事になるのは遺憾である。先づ海岸に於ける地形的變化の論文を見るに、「若狹灣一部の隆起現象に就きて」(上治寅次郎、地球)は若狹灣岸三方湖及び其の附近の湖が斷層地形に如何なる關係を有するかを論じたもので、「越後に於ける偽沈降現象と最近の海岸線移動」(徳重英助、地理學評論)は一昨年よりの連續であつて一月號に於て完結した長論文である。其他「松島の海岸」(渡邊萬次郎、地理教育)、「西薩の海岸砂丘に就きて」(小川英男、同誌)等がある。「鳥取縣日野川下流水路の變遷」(石川成章、地球)は日野川の水路變遷には顯著な事實があつて地形上略々之を推察し得るのみならず記録の上にも明らかに記載されたる事を指摘し、猶ほ山陰諸川の流路が多くは地球の自轉に基く偏向力の法則に従つて東に迂曲せるに、日野川のみは西に偏向して流路も逐次東より西に移つたといふ特例を擧げてゐる。「横手盆地の地形

學的並びに氣候學的研究」(福井英一郎、地理學評論)、  
「侵蝕面の發達史より見たる霞ヶ浦地方の地殼運動」(東  
木龍七、同誌)、「赤石山地の切崖面」(佐々木彦一郎、同  
誌)、「廣島縣高田郡上根附近の地貌」(下村彦一、同誌)、  
「東部筑豊地塊南部の地形發達史」(東木龍七、同誌)、「能  
登半島基部を中心せる古地理及び地形發達史」(望月勝  
海、同誌)、「支那大運河の古今の異同に就いて」(西山榮  
久、地理教育)、「大井川下流附近の地形」(淺井治平、同  
誌)、「阿弗利如に於ける地形的變化」(松尾俊郎、同誌)  
等を地形及び其の發達變化に關する研究として擧げ得や  
う。又斷層に關する考察も頗る多かつたが、「花折斷層の  
豫察」(中村新太郎、地球)は花折斷層の追跡記であるが  
其の内よりは斷層觀察上に於て大なる教示を受けること  
が多い、即ち大轉石の多いのは大斷層に沿ふた谷の特徴  
である事を教へられ、近江地志略を引用して地質學を基  
礎としない地理學の最も陥り易い缺點を指摘された。且  
つ花折斷層が生動斷層なるや否やの問題に關して實地見  
學の結果、花折斷層に沿ふた地變は斷裂其自身の結果で

はなく、單に急斜面に沿ふて昔の斷裂の結果崩壊し易く  
なつた岩體の破片が滑動したに過ぎないと結論された。  
其他「伊勢志摩地方の地質及び地形から推定される主要  
なる斷層」(大塚彌之助、地理學評論)や、「斷層に就いて」  
(津田秀郎、地理教育)等が主なる論文であつた。更に地  
圖學方面は如何であつたかを見るに、「地圖に於ける地貌  
現圖法の推移」(高木菊三郎、地理教育)は一昨年度に引  
續いて發表され、「ボンヌ式ミメルカトル式の地圖投影  
法」(岡田武松、同誌)、「經度緯度の簡單な測定法」(關口  
鯉吉、同誌)等に過ぎなかつたが、著書として「地形圖と  
地質圖」(上治寅次郎)、「地形圖の研究」(福田連)の二良  
書發刊され夫々専門的内容を豊富に盛られたる爲め斯  
道に便する所も大きかつた。氣候に關しては、「我國に於  
ける氣候分類に就いて」(福井英一郎、地理學評論)に於  
て先づ氣候なるものゝ定義に就いて諸家の説を引用し、  
氣候學は現在二つの部類に分たるべく一を空間的とすれ  
ば他は時間的であり其の利用方法より見れば前者は地理  
學的經濟學的であり外國の所謂氣候地理學に當り、後者

は確率論を基礎とした數學的で純粹氣候學の部類に入るべきものであるから氣候區も從つて二種類が得らるべきものとされた。而して本邦氣候區設定に當つては前者の氣候地理學的理論に従ひ氣象學的分類法を用ひ氣候要素として温度及び降水量を取つて、先づ氣温によつて五個の大氣候區即ち臺灣、内地、北海道、樺太、北朝鮮區とし更に内地區を七區に細分し北海道區を二區に分けてゐる。更に雨量に依つて本邦氣候區を南部式、太平洋式、日本海式、北部式に區分してゐる。此の兩圖を比較して日本の氣候は概略的に中央山脈によつて二つに大別さるゝ事を指摘した。「山上の氣象觀測」(佐藤順一、地理教育)は我國に於ける山上氣象觀測の現状を極く簡明に説明したもので、「日本アルプスに於ける氣象上の諸現象」(松田彦三郎、同誌)も通俗に氣壓、氣温、雲、雲海、御天水、御來迎、雨、雪、雪溪、雪崩等を記述したに過ぎない。特殊な氣候論文として、「雪崩の分類」(本邦中部高山地に於ける雪崩の形態に就いて)、「田中薫、地理學評論」を挙げねばならぬ。我國に於ける雪崩の研究は未だ海外

の夫に比して遜色多い事を起して、雪崩の分類に及び本邦及び海外の分類を紹介し更にアンドレ・アリツクス氏の雪崩の落下運動の階程に關する研究を並べ、是等に基いて論者自身が目撃せし特殊な雪崩に就いて精細な解説を下し我國中部山地特有の形式を確認せんとしたものである。其他特殊な問題として山川、湖沼、海洋、島嶼、石油、地質、礦物に關する貴重なる論文資料も數多い事であつた。(岡本)

本年の人文地理學界に於ては、第一に「支那歴史地理研究」(小川琢治、弘文堂)「人文地理學研究」(同人、古今書院)の二著述が出たこと、「經濟地理の教養」(田中薫、古今書院)「政治經濟地理學」(佐藤弘、古今書院)さては「富士の研究」(全六冊(淺間神社)の出版、「世界地理風俗大系」が將にその第一冊を出したこゝ等、我讀書界に於て目醒しい活動をはじめたこゝを挙げねばならぬのであるが、さうした氣運に乗じて、多くの雜誌に上された人文地理學界の業績はこれを數年前の過去に比し、正に刮目すべきものありと云ふべきであらう。紙面の都合であま

りに多數を述べきれないから、翻譯物は可成ぬきにして、一わたり各方面を一瞥してみたい。まづ理論の方面では「國境に就て」(小川琢治、地球)は國境の發生的過程を論じ、砂漠や森林海洋河川等の自然境界、及人爲境界としてのリメス、長城等に及び、ローマのリメスキ支那の井田ミの類似をのべ、轉じてゾーバンの壓力商數なるものを紹介し、「所謂地政學の概念」(飯本信之、地理學評論)はゲオポリチックの沿革ミその本質を論じ「人文地理學の一科ミしての政治地理」(小川琢治、地球)も同じ問題を紹介し、「政治學者の觀たる國家」(同人、同誌)にはチエレン氏の生體ミしての國家を讀み、國家を原則的に法律主體ミ見る在來の見解を離れて、社會的にも經濟的にも見うる國家觀、他の國家ミの交渉、生物學的有機體ミしての國家認識の必要を論じ、「自然環境と國民性」(伏見義夫、地理教育)は日本人の特性ミその自然地理界ミの關係をたゞり、「國家の位置」(飯本信之、地理教育)「地理學的單元論」(金尾宗平、地球)は各その題目の示めす論述である。人口論の方面では、「人口増加率ミ活力指數」

(石田龍次郎、地理學評論)は、活力指數即生死の比率から、人口増加の率が得られると同時に、その指數の大きな方が健全であり、さうした指數の分布に地理的の差があるミ説き、「沖繩島出移民の經濟地理學的考察」(武見芳二、地理學評論)「樺太入移民の經濟地理學的考察」(同人、同誌)共に其地方の生産物ミ人口移動の關係を考察したものであり、特に後者に増加しやすい男子の分布を論じ「東京市郊外に於ける交通機關の發達ミ人口の増加」(東京市役所)は結論ミして交通機關の發達ミ人口の増加ミの比例するミことを立證し、鐵道軌道は人口増加に先ち、乗合自動車、馬車の施設は人口の増加に後くれる。舊時の交通機關は人口を市に集中させ、近時の交通機關は人口を郊外に分散するミのべた。都市の研究に關しては「都市人口の種類に就て」(猪間驥一、都市問題)があり、「江戸ミ大阪の商業活動並思想人情の比較」(川本宇之助、都市問題)は徳川時代に一方が任俠に生き一方は打算に長じたミ論じ、「門前町の研究」(佐々木清治、地理教材研究)は門前町なるもの、發達を論じ、鳥居前、寺院門前、

御陵門前の三種をあげ、長野、金澤、西大寺、善通寺、琴

平、彦山、一の宮、香取、宇佐、日光、杵築町等を説明

し門前町の特殊形相として豊川稻荷門前及門前市場をあげ、「市場圏の地理的限界」(佐々木彦一郎、地理學評論)は朝鮮では二十キロの半徑の中心に市があること、

山東省でも、日本鹿角盆地でも同様二十キロ以内である。

東京附近の農事經濟地理圏も亦二十キロ以内である、これは手引車の往復十二時間の距離であるを論じた。支那

上代の都市計畫(伊藤清造、滿蒙)は洛邑を長安に於いて上代都市の大きき居構をのべ、「土地區畫整理を道

路行政」(岡崎早太郎、都市問題)「市場町の市場構造の一例」(西田與四郎、人文)奈良の丹波市の解説なきを始め

「久留米市」(中島幸一、地理教材研究)米子市(祝典兵衛、同誌)、「雪の長岡市」(橋本賢康、同誌)「十年後の秋田市」

(柴田良一、同誌)北九州諸都市の地理學的考察(佐々木清治、同誌)「新義州」(伊吹清男、同誌)「岡山市」(浦上宗

衛、同誌)「廣島市」(西龜正夫、同誌)「鳥羽町」(杉原靜、同誌)「濱松市の工業について」(千葉眞一、同誌)等いづ

れも都市研究の盛んになつたことを證する。

**聚落の研究**に關しては、「日本住宅の居住地理學的考

察」(小川琢治、地球)は藤田學士の日本民家史に關して

その考察を批判したもの、「北日本の聚落」(西龜正夫、同誌)は北國の屋根を壁を論じ、「北國に於ける農家の生活」(奈良環之助、人文地理)には特に北國住宅を精察に

紹介し、「歐米諸都市の住宅問題」(伊部貞吉、都市問題)はバリ、ベルリン、ウイン、ロンドン、ニューヨークの

住宅政策を論じ、「淺草の乞食」(大類伸、人文地理)は淺草といふ一區に限つての人文現象を紹介したものであ

り、「八ヶ岳山麓地理研究」(三澤勝衛、同誌)は八ヶ岳の裾野の自然地理を聚落との關係及、村落開發の年代的考

察であり、「静岡縣の農業地理的區劃」(佐々木清治、同誌)は特に茶、山葵、苺に關しての聚落を農業の關係を

のべ、「長野縣に於ける人口現象の一端に就て」(春日琢美、地球)は人口密度が地形に支配され、千曲川斷層、糸魚

川静岡地溝線に沿ふて聚落の發達してゐることをのべたものであり、「日本の瑞西、檜原村」(高頭敏之助、地理

教材)はその村の職能、風習を紹介し、「支那古代聚落論」(那波利貞、歴史と地理)は聚落が上代に、丘陵の南麓に占據されて發生したと云ふ字の意義を明にしたものである。「日野商人團の發達」(牧野信之助、同誌)は江州商人の發生を論じ、「麻雀と伊豆志」(山本信哉、民族)は上代の鐵と銅とその文化の分布を語る、但馬及關について説明し、「飛驒の民家」(藤田元春、歴史と地理)は我國山國の特例としての飛驒白川の民家を論じ、「紀の國めぐり」(藤田元春、同誌)には紀州の民家及熊野のバラック生活をこいてゐる。

支那に關する人文地理も研究が多い「支那古代の土地制度に就て」(下田禮佐、歴史と地理)は井田、及均田制の解説であり、「峨眉廬山と長江の流水」(後藤朝太郎、地理教育)、「支那大運河の古今異同に就て」(西山榮久、同誌)「晋代南部アジア瞥見」(佐伯義明、史林)「支那の經濟資源に就て」(木村増太郎、地理教育) いづれも題目の論考である。「中國文學の地方的背景」(朱種因、滿蒙)は主として支那の方言を、時代及土地の自然が生んだものこ

して、方言文學の成立とその研究の要點をのべ、「渤海灣を周る古代民族」(八木梓三郎、滿蒙)には、九夷以下各時代の民族の變遷を細説し、「支那農村の階級構成」(橘樸、滿蒙)「南方の小作農保護に就て」(田中忠夫、滿蒙)「支那鐵道系の現在及將來」(小島憲、滿蒙)「北支那先史時代の人類に就て」(小川琢治、地球)「支那の農業經濟地理」(佐々木彦一郎、地理學評論)「北滿州の水運」(星田信隆、滿蒙)をはじめ、滿蒙の「北滿特輯號」には、北滿の水田、小麥、林業、漁業、羊毛等に關する論説報告がある。農業經濟地理の方面では「本邦に於ける農事等着手線圖」(金尾守平、地理學評論)がある、これは大麥、稻及春蠶掃立の等時線圖をしめし、「大阪府下の灌漑農業」(山極二郎、同誌)は歴史上に古い狭山池以下、府下に多い溜池をはじめ、大阪府下の井戸水、河川灌漑地の分布を論じ、「臺灣産米について」(石田龍次郎、同誌)は内地米の移植の結果を論じ「諏訪の水車」(牛山喜、同誌)はこの地方の卓越風によつて、地下のアンモニアを汲上げる水車の景観と農業をのべ、「鳥取縣日野川下流水路の變遷」(石川成

章、地球」〔福岡地方の地理的事實〕〔金尾宗平、地球〕〔灌溉用水の一考察〕〔江畑弘毅、地學雜誌〕〔栃木縣安蘇郡の湧水とその量的變化と農業の關係をのべたもの〕〔臺灣の茶樹及其製茶業〕〔北村實、地理教育〕等がある。次に一般經濟地理の中で特に石油に關したものが多く、即ち「國際石油地理論」〔田上政敏、同誌〕「石油地質學概要」〔大村一藏、地球〕「石油に就ての地理學的一考察」〔川口丈夫、地理教材研究〕「エストニア國の石油頁岩事業」〔小林儀一郎、地學雜誌〕「ボリヴィアの石油資源と其將來」〔溪友一、同誌〕「日本の石油產地」〔松澤傳太郎、地理教育〕等いづれも石油に關係した論文であつた。其他「本邦鑛業の今昔」〔石川成章、地球〕「獨逸の地理學界」〔寺田貞次、地球〕、「ロシアの領土と人口」〔シメノフチャンシヤンスキー、地球譯〕、「巴里と倫敦」〔戸田正三、大大阪〕「滿州に於ける支那勞働者」〔武居郷一、滿蒙〕「オーストラリアの富源」〔玉城肇、地理教育〕「白色人種の凋落」〔松尾俊郎、同誌〕「アメリカ地中海及其陸環の國家的形象」〔飯本信之、同誌〕「南洋の各殖民地とその統治策」〔東郷實、同誌〕「砂漠と

水」〔齋藤文雄、同誌〕、等いづれもその題目についての論文であつた。最後に交通地理に關しては、「我國の國際運輸」〔富士徳治郎、同誌〕、「戰前に於ける歐洲の國際河川」〔佐藤弘、同誌〕「內陸交通路としての河湖運河」〔富田芳郎、同誌〕「世界飛行船界の趨勢」〔本間華江、科學智識〕等がある。以上の記述によつて本年間に於ける人文地理學界の傾向が都市聚落等の問題支那及農村經濟地理の方面に於て特色を發揮したといひうると思ふ。見殘し讀みのこしの論説も多いことであるが、徒らに紙面をふさぐことを恐れ、本年はこの程度で擱筆する。〔藤田〕